北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 40号

2001年1月～3月

ACC－J茨城

目指せヒマラヤ!!

RocK and Valley 2001'春' No.40

阿弥陀岳南稜を行く。《Photo by, Sasahira》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

いつまで山を登れるか

五大大陸最高峰登頂者の最年少記録が日本人によって更新されたと聞いた。また地球の最高峰エベレストの最高齢登頂者が更新されたとのニュースを耳にした。どちらも素晴らしい記録と思うが、８０００m未踏峰が無くなった現状では最高齢&最年少登頂記録しかニュースにならないのもやむを得ないと思う。地球上にはまだまだ未踏峰があると言う事は一般的にはあまり知られていないらしい。２５年前にＡＣＣ－Ｊがアタックしたブラッツヨース(６１９２m)は四方を岩壁に囲まれ未だ誰にもその頂きを踏ませていないと聞いている。我々がアタックして踏むことが出来なかった頂きをいつ誰が初登頂するのか興味津々である。一方国内に目を転じてみると、日本中の有名な山には中高年登山者のパワーが溢れている。無雪積期に限って言うと、百名山ブームもありどこの山に行ってもオジチャンパワー&オバチャンパワーに圧倒されてしまう。（我々もオジチャンの一員であるが・・・・。）そこは最高齢&最年少登頂記録等には無関係の世界であり、とにかく登る事が楽しい世界である。

昨年テレビの特集で”９６歳の山スキーヤー”との題名でプロスキーヤー三浦雄一郎氏の父君三浦敬三氏の事をドキュメンタリーとして放映しているのを見ました。三浦敬三氏は現役の山スキーヤーとして今でも春の立山を滑っているとの事だが、これを見て我々５０代の人間はまだまだ若造との認識を持ちました。我々がいつまで体がもつか分かりませんが、三浦敬三氏の年齢まで達するまでにはまだ４０年以上あります。これまでの登山人生以上の長期間、登山を楽しむ事が出来ると思うとワクワクしますが、しかしあと４０年生きられるか否かがが最大の難関です。三浦氏の姿を拝見すると目的を持ち、充実した日々を送っていることが若さの秘訣ではないかと一人で納得しています。三浦氏は今でも年間１００日以上スキーで滑っているとある本で読んだことがある。それもただ単に滑っているのではなく、スキーの指導及びツアースキーのリーダーとしての山行との事。まさに現役プロスキーヤーの面目躍如といった感じです。三浦氏が本格的に山スキーを始めたのは５１歳からとの事。三浦氏曰く

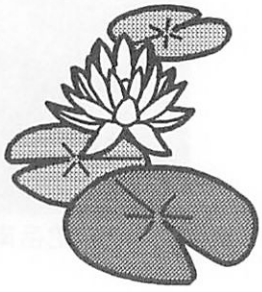
『私の人生は５０歳から』

とを聞くと我々も益々元気にならざるを得ない。冬は寒いから嫌だとか、年だから遠出するのは億劫だとか言っていたのでは三浦氏に笑われてしまう。

『大切なのは興味と好奇心。興味をもったらとことんやる』と三浦氏は言う。

同じような事を実践している人が私の身近にいるような気がするが？……。私の友人に７５歳のＷＳＦ（ウインドサーファー）がいる。彼は６０歳で会社を定年退職した後ＷＳＦを始めて、１５年経った今でも風があると２日に１回は板に乗っている。彼の周りは若いサーファーばかりだが、彼は若いサーファーの目標になっている。三浦氏と同様に好きなことを実践しているので若々しい感じがする。彼も三浦氏の出演したテレビは見たらしい。彼は『あと１０年。いやあと１５年はＷＳＦを楽しみたい』とも言う。登山に関して我々にはこれまでに培ってきた登山の知識・技術・装備と素晴らしい仲間がいるので、体力&健康を維持できれば三浦氏に近い年齢まで登山&山スキーを楽しむことが可能と考える。いま私は１昨年から始めたテレマークスキーが面白くてたまらない。なぜテレマークスキーに魅せられたか今もって分からないが、テレマークスキーの不安定なところが気にいっているのかも知れない。まだ山の中を縦横無尽に滑る域には達しておらず、発展途上過程のテレマーカーだが早く雪のシーズンがこないか今から楽しみだ。

木村　一



《目次》

２００１年　春号　１月～３月　ＡＣＣ－Ｊ茨城

巻頭言	〔木村〕・・・	１
集会報告	・・・	３
山行報告	・・・	４
横尾尾根	〔渡辺〕・・・	５
二ツ箭山	〔渡辺〕・・・	６
八ヶ岳・赤岳主稜	〔遠藤〕・・・	６
袋田の滝・アイスクライミング	〔生井〕・・・	７
石裂山	〔渡辺〕・・・	８
霊山	〔渡辺〕・・・	９
安達太良山	〔松井〕・・・	９
八ヶ岳・阿弥陀岳・南稜	〔遠藤〕・・・	１０
Ｂ級山岳指導員検定試験富士山の部	〔本図〕・・・	１１
うんりゅうばく！	〔吉田〕・・・	１２
富士山が世界遺産に登録されなかった訳	〔生井〕・・・	１２
八ヶ岳・石尊稜	〔吉田〕・・・	１３
谷川岳・一の倉沢・一・二の中間稜	〔笹平〕・・・	１４
安達太良山・山スキー	〔木村〕・・・	１５
会津三岳岩・スキーハイキング	〔木村〕・・・	１６
逆・深夜鈍行（完結編）	〔本図〕・・・	１７
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・	２８
編集後記	〔生井，本図〕・・・	３０

表紙…袋田の滝　《photo by T.Sasahira》

集会報告

（於、スカイラークガーデン）

［　１　月　］

１月１０日
　出席者　本図、木村、菊地、鯉河、笹平、吉田、遠藤、渡辺
１月２４日
　出席者　本図、木村、菊地、中島、笹平、吉田、遠藤、渡辺、佐野

［　２月　］

２月　７日
　出席者　本図、木村、菊地、鯉河、笹平、吉田、渡辺
２月２１日
　出席者　本図・木村・菊地・鯉河・笹平・吉田・渡辺・松井

［　３月　］

３月　７日
　出席者　本図、木村、菊地、笹平、吉田、遠藤

３月２２日
　出席者　本図、木村、菊地、笹平、渡辺

山行報告

《２００１年　1月～3月》　№４０号

---【　1月　】---

１２月３０日～１月２日	北ア横尾尾根	Ｌ笹平、本図、渡辺、佐野
１２月３１日～１月１日	八ヶ岳	Ｌ木村、菊地、遠藤
１月７日	二ツ箭山	Ｌ本図、渡辺
１月１３～１４日	八ヶ岳赤岳主稜	Ｌ笹平、遠藤
１月２０日	袋田の滝	Ｌ名雪、遠藤
１月２１日	袋田の滝	Ｌ本図、生井、笹平、渡辺、吉田、松原、水島
１月２８日	石裂山	Ｌ本図、渡辺

---【　2月　】---

２月４日	霊山	Ｌ本図、渡辺
２月３日～４日	安達太良山	松井
２月１０日～１２日	八ヶ岳阿弥陀岳南稜	Ｌ笹平、渡辺、遠藤
２月１０日～１２日	富士山	本図ほか２０名
２月１８日	雲竜渓谷	Ｌ本図、吉田

---【　3月　】---

３月１１日	八ヶ岳石尊稜	Ｌ本図、吉田、渡辺
３月１７～１８日	谷川岳・一の倉沢１・２中間稜	Ｌ笹平、渡辺
３月２０日	安達太良山	木村ほか２名
３月２４日	三岩岳	Ｌ木村、名雪

横尾尾根

２０００．１２．３０～２００１．１．２
パーティ　Ｌ笹平孝、本図一統、佐野尚史、渡辺聡子

『釜トンからは絶対そりだぜ！もしかしたら横尾まで楽勝かもな。』
という親分の声は半分正しかった。釜トンネルを越えると道路はアイスバーンとなっており、そり２台にザックを２つずつくくりつけ上高地までは楽に到着できた。上高地を過ぎると非常に引きづらくなったので佐野さんと私は荷物を背負ったが、そりのオーナー達は
『背負った方が絶対に楽。』
といいながらもせっかく持ってきたのだからと頑張って引いていた。いよいよ引くのが重労働となりあきらめて背負ったところは横尾の手前１５分くらいのところだったようで割合すぐに横尾の小屋が見えてきた。水がとれたこともあって本日はここまでとし、とりつきの確認をした後テントでゆっくりした。

２０世紀最後の日であるが、天気はいまいち。ルート図によると尾根へは３のガリーを登るのが一般的であるようだが、踏み跡は２のガリーと３のガリーの間の尾根を登っており、中途半端に雪のついた急斜面をピックを地面に打ち込みながら登ると、２時間ほどでＰ２の手前に出た。Ｐ２を越え、フィックスがはってあるドキドキする両側が切れ落ちている岩場を越え、Ｐ３のところで赤布を木に結びつけて先へ進んだ。だが、途中で踏み跡が消えてしまい、深いブッシュをこぎ、気の遠くなりそうな木登りが続いた。道を間違えてしまったようだ。Ｐ３までもどろうということで、さらに気を遠くしそうにしながら、つけた赤布のところに戻った。約２時間の藪こぎ、木登りでへとへと。Ｐ４のいやらしい登りを登り、Ｐ５の手前のビバーク地に着いたときには５時をまわっていた。天気予報を聞いてみると、冬型がますます発達し山は大荒れということであり、明日中に稜線まで抜けて戻ってくるのは無理との判断によりここで引き返すことに決定する。

目を覚ましてみるとなんと快晴。これは疑似好天で、だまされると後で大変な目にあうとの隊長のお言葉である。風は強いが昨日とはうって変わった天気の中下山を開始する。私達のいるところは主稜線の東側なので風が強いといってもさほどでもないが、主稜線では絶えず雪煙があがっており、かなりの強風が吹いていることが容易に想像できた。 時間の余裕もあるので、ゆっくりと下りＰ２でテントを張った。

昨日の快晴はどこへやら、吹雪である。昨日おりてきて大正解だ。Ｐ２から取り付きまではほとんど懸垂をつかう。尾根を降りきって一安心、横尾へ行きデポしておいたものを回収して上高地へとむかった。横尾から釜トンネル間もものすごい風と雪だった。今回、体調が悪く喘息がでてしまっていたので、トンネルの入口が見えたときには心底ほっとした。

（渡辺　記）

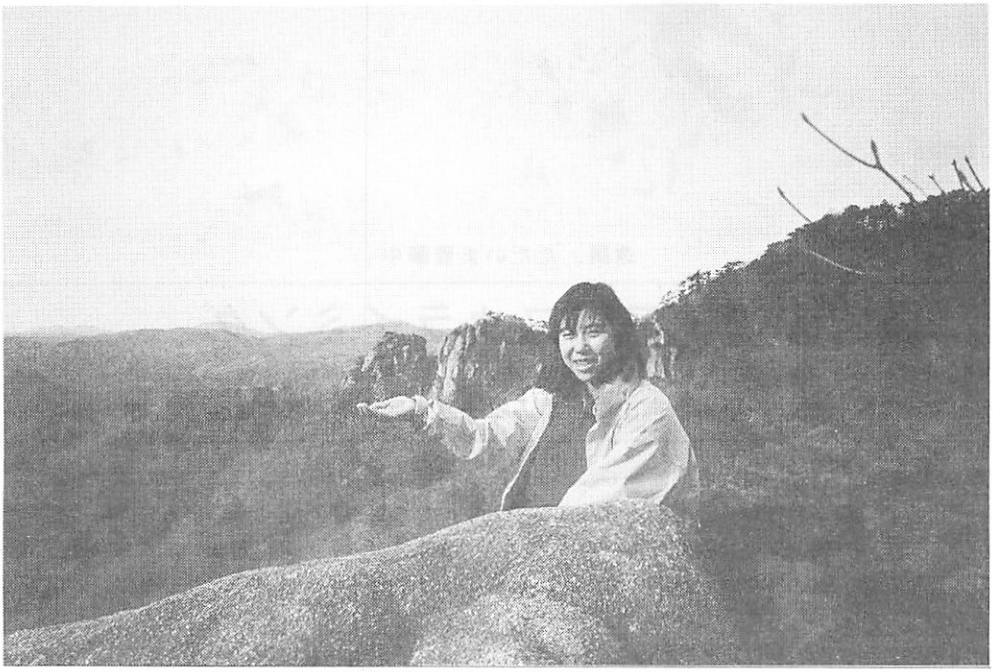
北アルプス、横尾尾根《最終テントにて》

二ツ箭山

２００１．１．７
パーティ　Ｌ本図一統、渡辺聡子

実家の近くにありながら今まで行った事がなかった二ツ箭山を登りに行くことになった。いわきでは珍しいことに前の日に雪が降り、そんなに人もいないだろうと思っていたのだが、以外にも登山口駐車場は満車状態だった。かなり人気のある山らしい。二ツ箭山は歩き出しがご神体の滝の左を直登し、沢ぞいを歩くという沢登りもどき、沢から離れるとハイキング、頂上直下は岩登りという一回で三度おいしい山登りを味わえるところだった。頂上の岩峰はルートになっているらしくあちらこちらにハーケンと終了点のチェーンがピカピカしており、次にいくときにはフリー用の靴とロープを持っていこうと思いながら二ツ箭山を後にした。

（渡辺　記）



岩峰を手玉にする渡辺

八ヶ岳・赤岳主稜

２００１．１．１３～１４
パーティ　Ｌ笹平孝、遠藤和彦

正月の休み明けだからか、登山者は少ないように思えた。行者小屋に着くと小屋は閉まっていて、テントは一張りもなかった。いつもの場所にテントを張ってから出発する。取り付きには先行パーティがいて、おばさんが苦戦中だった。上に抜けるまで登山道で少し休む事にしたが、結局４０分ほど休む事になった。すでに昼過ぎだったので、この調子じゃ暗くなるのは確実と思い、ヘットランプを取り出しやすい所にセットしておく。取り付きの所で準備をしていると、先行パーティが落石混じりの懸垂下降で、取り付きに降り始めた。日帰りの予定なので諦めると言っていた。１ピッチ目は、チムニー状を登り右へ曲がるので、ロープの流れが悪かった。それから、ルンゼ状から次の正面の凹角の所では、少し手前の壁にビナがぶら下がっていたので、そこを登る事にした。思ったより難しかったので、シュリンゲをうまく使ってＡ０で越える。リッジに出てからは難しい所もなく、赤岳頂上に出た。

次の日は、石尊稜の予定だったが、アプローチが判らず、ルンゼを上り下りしているうちにタイムアウトになり、とにかく取り付きまで行く事にした。この時点で石尊稜からラッセル訓練になる。石尊稜の取り付きと思われる所に着いた頃には、すでに昼を過ぎていた。

（遠藤　記）

遠藤、だだいま登攀中

袋田の滝・アイスクライミング

２００１．１．２１

パーティ　Ｌ本図一統、笹平孝、吉田仁、渡辺聡子、水島幸男、松原丈男、生井一男

一月の寒い朝、茨城とは違い帯広の朝はとてもしばれる。が、屋内は暖房設備がしっかりしていて２重窓で、とても暖かい。シャツ一枚で気楽な格好でいられる室内。しかし窓の外は雪一色。といったメールがさおり姫から届いた。北海道は一回しか行っていないが、私が思っている風景と同じ感じだ。あの時は野外は寒かったが屋内は寒さを感じなかったような記憶が残っている。

その他の届いたメールを見ていたら、ＡＣＣ－Ｊのメーリングリストに袋田の滝が凍ったので、氷登りに行く事が載っていた。

『袋田の滝かぁ、』・・、袋田の滝は私がまだ２４歳の紅顔の美青年だった頃、八代、長浜さん、私とあともう一人？？？、誰っだけかなぁ、？？？、う～ん、思い出せない。

初めての氷登り。あの頃は恐いもの知らずで、八代と長浜さん。私と○○君で氷に取り付いたのだけど、初めての氷登りでいきなりトップで取り付いて、展望台のギャラリーの前で氷からアイゼンが外れ落ちそうになって、展望台の方から『ウワァ、キャー』とか黄色い声援があった記憶が残っている。あれ以来何回かは袋田に行ったのだが、凍らず空振りで帰ってきた。そうこうするうち暫く袋田の滝からは遠ざかっていた。

今回は大丈夫そうなので、ともかく参加したいとのことをメールで発信しておいた。後日、メールに集合場所、時間が入っていた。

２０日の夜、何やら白いものが降ってきた。雪である。昼間スタッドレスに履き替えておけば良かったのだが、大丈夫だろうと思っていたのが裏目に出てしまった。慌ててスタッドレスに履き替えて大雪の中を一人、集合場所（土浦協同病院パーキング）に向かった。

今回の山行メンバーは、本図さん、笹平、吉田、渡辺、私とそして東京から水島御大と松原さんの２名。彼らとは現地で合流する事になっていた。現地到着後、携帯で連絡して無事合流、合流後一杯飲んで、各々の車に戻り就寝。

翌朝、袋田の滝まで連帯を組んで、行進していく（そこに水島御大の姿はなかった）。展望台から見える一段目の滝から取り付く。もうけっこうの人数のアイスクライマーがたむろっていた。

一段目は、本図&渡辺。笹平&吉田で組んで登り、私はソロで登り練習する。皆、氷登りも大分上手くはなっているようだった。

二段目の滝は中央の滝の立っている所を私がトップで行き、その後を渡辺、本図さん、松原さんと続き、笹平と吉田はその左隣の乱氷帯のように氷が張り出している登りずらい所を登っていった。昔からいわれていたがやはり氷登りは道具が勝負。今回新しく買ったバイル（シャルレ＝クオーク）がとても利いて楽々登っていける。

三段目はノーザイルでも行けそうな傾斜だ。一応ザイルはつけるが、楽々登ってあとは滝の遊歩道まで這い上がり、展望台まで戻って一番下の滝でまた練習したようだった。が、私は一人で皆に遅れて下った為、皆は車に戻ったのかと思い、車まで戻ってしまった。皆は練習しているだろうとは思ったのだが、滝まで戻るのもかったるくなったので、皆が練習が終わって帰ってくるのを待って時間を潰していた。暫くして皆と合流し一路帰途に就いた。

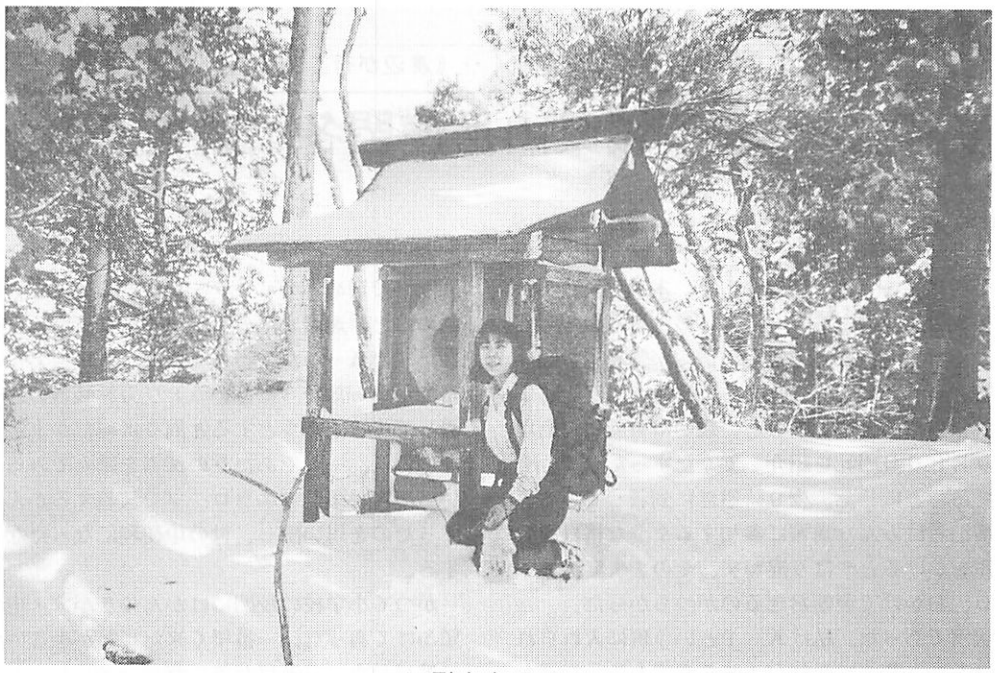
（生井　記）

石裂山

２００１．１．２８
パーティ　Ｌ本図一統、渡辺聡子

今年の冬はやけに雪が多い。土曜の朝から雪が降り続いたので、近場にある山の中から本図さんが前から気になっていたという鹿沼の奥にある石裂山に行くことになった。登山口のある加蘇山神社に着いたころには雪も止み月がでていた。翌朝は快晴で歩き出してみると既に何人か山に入ったような後があった。我々以外にも物好きがいるものだと思っていると何かで一杯になったスーパーの袋を手に降りてくる人に会った。訪ねてみると、杉の枝に寄生する”セッコク”なる蘭をとりに来ているという。手の届かない高いところに生息するので雪が降ったり強い風が吹いたりして枝が折れ、落ちたものを拾うんだそうだ。しばらく歩くと踏み跡は消え、静かな山歩きとなり、途中雪に埋まった鎖を掘り出したり、腰までのラッセルをしながら東剣が峰、西剣が峰を通り頂上に立った。鹿沼でれっきとした冬山気分が味わえるとは以外であった。

（渡辺　記）



石裂山山頂

霊山

２００１．２．４
パーティ　Ｌ本図一統、渡辺聡子

冬山低山ハイキングは今回で３度目である。今回は本図さんが早めに出発できるとのことで、ちょっと足を伸ばそうと行き先は霊山になった。霊山は岩峰の山ではあるが、二ツ箭山や石裂山のように鎖場があるわけでも、岩場があるわけでもなく、奇岩をながめながらハイキングをする山であった。そんな訳で踏み跡が無くなってからは汗を流しながらひたすら膝上ラッセルに終始した。総じては天気もよく、景色もよく、ハイキングの途中にでてくる”○○の岩”というのも奇妙でなかなかおもしろかった。

（渡辺　記）

膝下のラッセルが続く‥《渡辺が行く》

安達太良山（茨城県山岳連盟冬山講習会）

２００１．２．３～４
松井裕史

私だけ冬山講習を受けていないので、本図代表から県岳連主催の講習を受講するようにと言われ単身参加した。スキー場のホテルで仮眠できるとの情報が勤務先の知り合いから寄せられたので、確認すると夜行バスが発着するので眠れないでしょうとのこと。親切にも麓の湯治場（素泊まり２３００円）を紹介してくだすったので、そこを利用することにした。夜９時過ぎに到着してみるとその日の宿泊者はみんな講習に参加するような格好をしている。声をかけるとやはり違わず、そのまま宴会モードに突入し、おかげで翌朝おきるのがつらかった。

初日は吹雪であった。私はＡ－１という班に入れられた。周りはもっと若くて元気がよさそうである。なぜかトップで進めとのリーダーからの命令に、林道をたどり始めると早速腰までのラッセルになった。（理由を後でただすとＡ－１が一番強そうなグループで、かつ私が一番でかかったからだという）ワカン装着の命令に早速装着して歩き出そうとすると周りは何だか上手くつけられない様子。一人であたりの深雪を踏んでみると具合がいい。小さい頃、マニラロープで装着するかんじきに手こずったのを思い出し、世の中便利になったなと一人述懐する。

かつて小学校の校門にはかんじきが大・中・小と三種類かけてあった。一番早く来たヒトが小さいかんじき、二番目が中、三番目が差し渡し一メートルもある大きな

かんじきでラッセルすることになっていた。踏まねば校舎に入れないのだからいやだといっても仕方ない。まさかあのころの経験がこんなところで役に立つとはと、人間万事塞翁が馬を再確認したのであった。

グループ内で順次トップを交代しながらあくまでも最前列を維持し、２時間ほどでくろがね小屋着。しばらく休憩してまずアイゼン歩行、ついで雪洞作りとなった。アイゼン歩行はともかく雪洞作りは小学生の頃からの遊びで何となく慣れている。さして苦労もしなかった。

私はＡＣＣ－Ｊの山行ではいつもお荷物で気も体も使ってへとへとになるが、今回は中高年の講習も一緒と言うことで楽なペース終始した。夜は夜で大宴会になったが、教官が異口同音にわがＡＣＣ－Ｊ茨城のレベルの高さをほめてくれる。いかに高く評価されているのか再認識し、個人的にもっと努力しようと考えたのである。

翌日はアンザイレンして確保する方法について学んだが、これはもう少し経験を積まなければならない技術である。昼過ぎには下山して講習終了。結構楽しい経験であった。

（松井　記）

八ヶ岳・阿弥陀岳・南稜

２００１．１０～１２

パーティ　Ｌ笹平孝、渡辺聡子、遠藤和彦

今冬３度目の八ヶ岳、今年は１００年に一度の大雪とのことで、来るたびに道脇の雪は多くなっている。前日夜に美濃戸口に到着した時は、周りの積雪は１ｍを超えており、いつも使う美濃戸までの林道は、さすがに通行止になっていた。

旭小屋入り口の別荘地に行くも、大雪のために道はかなり細くなっており、駐車スペースはなさそうである。今年は、１０万円で買った走行１４万キロのオンボロレガシーが大活躍している。こんなところは４駆でなければ入れないところだった。しかし、結局駐車スペースがないので、ここから入るのはあきらめざるを得なかった。結局引き返して立場キャンプ場経由で入山することにする。後から聞いた話では、後続パーティは雪壁を自分たちで除雪して駐車スペースを拵えたそうである。キャンプ場の方も雪に埋もれていたが、駐車スペースは存分にあった。

２／１１。

林道を旭小屋に向かって歩き始める。最初はトレースもついていたが、そのうちラッセルに。うーん、入山パーティはあるのだろうか？このまま続いたら旭小屋往復で終わってしまうかなあ？？などと会話しながら進むこと３時間。途中進退窮まりワカンのまま小さな沢を渡渉したりもする。しばらく進んで昨日の別荘地からとの道に合流したとたん、あるではありませんかバッチリした踏み跡が。もうラッセルの必要は全く無くなって、少々拍子抜けしてしまった位だった。

後は単調な林道を３０分ほど歩き旭小屋へ。そこから急登が始まる。右横の入山禁止という看板と鉄線がうっとうしい。どうやらキノコ山らしい、それにしても１時間進んでもまだ鉄線が張り巡らされているのはものすごい執念としか言い様が無い。

本日は稜線手前の青薙付近に泊。ラッセルで予想以上に時間を食ったので、権現へのルートはあきらめざるを得なかったが、この先行者経由で美濃戸に下るか、同ルート下降するかでもめる。渡辺女史は下降をものすごく嫌がっていた。結局美濃戸に向かうことになり、少々時間を持て余しそうだと思っていたら、翌日に笹平Ｌより南方リッジに行きましょうとの提案があった。昨日は思いもしなかったが、そこを組み合わせれば結構面白い山行になりそうだ。寝ながら閃いたのだろうか？

キャンプ場(7:00)－旭小屋(11:00)－青薙(15:00)時間は概略

２／１２

昨日の急登の続きをしばらく行くと稜線に出る。とたんに風が強くなり完全防備をしてから進むことにする。阿弥陀に近づくにつれて、景観はどんどんカッコ良くなっていった。核心にはフィックスがついており、全く苦労せずに超えてしまい、阿弥陀のピークにあっけなく到着。苦労しそうな部分は埋まってしまっていたのだろうか。つづいて中岳経由で文三郎の途中から南方リッジへ。段々吹雪いてくるも視界はバッチリだったが、寒い。ビレイする手が時々寒さで痛くなってきた。こんな中の登攀も八ヶ岳ならではなのだろう。だだっ広いリッジを進むことほど無く山頂に着。前回は眼鏡が凍って大変だったが、今回は２重窓のゴーグルをしているので快適である。これは眼鏡付の人にお勧めだ。今まで１ｄａｙコンタクトとかいろいろ試したが、風ですぐ飛んでしまったり未だに眼鏡に代わるものを発見できていない。眼鏡はそれで、曇ったり水滴で見えなくなったりするので、何とかならないものだろうか。

無事行者に到着すると、１月の静寂が嘘のように一面物凄い数のテントだった。水はホースで全て小屋に行ってしまっており、我々はホースの割れ目からのおこぼれ

水をチョロチョロと汲まざるを得なかった。

青薙(7:00)ー阿弥陀山頂(10：30)ー文三郎取付(12：00)ー赤岳山頂(14：00)ー行者小屋(15：00)(時間は概略)

２／１３

通いなれた道を美濃戸口へ。今回は久しぶりの林道歩きがあったが、それほど苦ではなかった。逆コースの入山は登りで大変なのだろう。

正月山行で菊地さんに教えてもらった双葉サービスエリアのカツ丼が、このところ八ヶ岳下山後の定番メニューになっている。これはうまい。

（遠藤　記）

Ｂ級山岳指導員検定試験富士山の部

２００１．２．１０～１２

本図一統

去年から始まった、東京、埼玉、茨城の、３県合同Ｂ級検定試験の専門課程はこの富士山で終了となる。今回は茨城から３名の受験者がいる。参加してわかったことだが、私が一番年上だろうと予測していたけど、実際はもっと大きい方がたくさんおられた。数度にわたる机上講習と、三ツ峠における岩登り実技はすでに終った。こんなに何日も休日を犠牲にするなら、やらなければよかったという後悔もあるが、始めた以上は意地でも最後までやり通さなければ、と一人さびしく家を出る。

河口湖までくると雪が多くて驚く。そういえば先日のニュースで河口湖は積雪７０センチとか言っていた。道路わきに除雪した雪が山と積まれている。馬返しまでデリカを走らすが、道路の両側は壁になっており、まるで雪国にでも来たようだ。四駆でなければまず登れまい。今日、八ヶ岳に行っているはずの笹平パーティが気掛かりになり電話すると、美濃戸にいるとのこと。やはり八ヶ岳もかなりの積雪だが元気だとのこと。

１０日。たしか佐藤小屋前に集合する予定時間は１０時だったはずと記憶しているが、集まって来たスタッフや受講者と一緒に馬返しを出発する。私は富士山を下から歩くのは初めてだ。今は使われていない様子の小屋が１合ごとにあるが、その建物になにか風情を感じ、昔の富士登山に想いを馳せた。

佐藤小屋に着くとまだ開いておらず外で着替えやら準備をする。ちょっと寒い。そのうち全員そろったので講習会をはじめることになった。今回の講師は、ヒマラヤ登山で有名な、あのチョモランマを登った小野寺斉さんである。岩登り検定の時の講師は、ウルタルⅡ峰を登った堤信夫さんだった。有名なこの二人の登山家の性格は対照的に感じた。私はどちらのタイプでもあるまい。きっとこの中間のタイプだと自分では分析する。

習う技術はすべて経験済みのことがほとんどで、雪上歩行、滑落停止、ザイルを使った制動確保などであった。夕方まで訓練をして小屋に戻る。

佐藤小屋は我々の他、神奈川県岳連救助隊、どこかの中高年団体で混雑しており、食事も２回にわけてとった。カレーなのだが、具もご飯も用意された絶対量が少なくて物足りない。さらにビールも売れ切れてしまい、酒も少なく寂しい夜であった。なんでも小屋主が、我々のくる日を１週まちがっていたらしく、用意をしてなかったとのことであった。これで一泊分の料金はちゃんと取られるのだから腹もたってこようというもの。

１１日。朝食をとろうとするも、昨日と同じでご飯の絶対量が少ない。ただご飯の量が少ないだけなら我慢もできようが、おかずは生たまごとオシンコだけなのに、たまごが人数分用意されてなく、早い者勝ちとはこのことで、遅れた人は数切れオシンコと、少々のウインナソーセイジとみそ汁しかないといったありさまであった。

天気は風が強く下り坂なので、今日のうちに検定まで済ませてしまうとのことだ。これといって目新しい技術はなかったので、ここで記述するようなことはないが、講習&検定は坦々と行われていった。実技が終わり次第、小屋に戻り口頭試問である。自分では知っていることでも、それを人に分かりやすく説明するのは難しいものだ。

検定が終わるとなにもすることがないので、講師とかスタッフとか講習性のみなさん、それから神奈川県救助隊も加わって、手持ちの酒を持ちより宴会となった。神奈川県救助隊のミニ講習会なども開かれて楽しい一時を過ごした。ここで教わったロープを使った即席担架の作り方は、為になるが今は忘れてしまった。夜中は強風が吹き荒れて八ヶ岳パーティはどうしているか心配になった。皮肉にもどういうわけかこの夜はトイレが近くて、佐藤小屋はトイレが外なので辛い。日中も吹いていたので、この週末は頂上まで行けたパーティはいなかっただろう。

１２日。今日は下るだけなので、準備ができた者から三々五々下って行く。天気も回復し、風も弱まり気持ちよかった。八ヶ岳パーティからも下山の電話があったので安心して帰路についた。

追伸　この専門課程が合格しても、４０時間に及ぶ共通科目の講習と、その検定試験が残っている。いつになったら終わるのか先は長いのだ。

（本図　記）

うんりゅうばく！

２００１．２．１８
パーティ　Ｌ本図一統、吉田仁

本図隊長と二人、雲竜瀑に行って来た。車止めのゲートに着くと数台の車が止まっていた。しかし、さすが私達だ！そんなゲートなどチョチョッイと開けて深く掘られたわだちの林道を、突き進む。今回も、かなりインチキが、できた気分がいいぞ！その場所は、とても夜景が綺麗でとてもロマンチックな場所であったが、今回はヤロー二人な訳で、べつに愛を語り合う訳でもなく、さっさとビールを食らって、その夜景に向かって小便をして寝た。ん～気温があったかいのが気になる！。

翌朝、以前気温高し！。イチモツの、、、じゃなくて一抹の不安がよぎる。雲竜渓谷に降り立つとアイスワールドが、広がっていた。点在するアイスボルダー、トレールの横には、アイスカーテン、対岸には、アイスピラー。すばらしい、すばらしいぞ！雲竜渓谷！！しかし、あちいなあ～、、、しばらく行くと、アイスピラーが根元から折れて地面に突き刺さってた。帰ろっかな～。雲竜瀑が見えて来た。もう、取付いてるアイスクライマーがいる、気のはえ～奴らだ！まあ～、でも登れるってことか。あれれ、取っ付きに着いたら下りて来ちゃったぞ。どうしたのかしら？？あー、スカートのところに物凄い亀裂が入ってる。物凄い音もしてる！鹿も死んでる！超暑い！１０℃越えちゃってる！帰りましょう、本図さん！しかし、さすが私達だ。ただでは帰らん。雲竜瀑分の距離を、そこら辺の氷で登って、帰って来た。まあ～来年があるさ！よかよか。

text by jin

---富士山が世界遺産に登録されなかった訳---

某テレビ番組で「なぜ富士山は世界遺産に登録されなかったのか」という放送をやっていた。それは余りにもゴミが多く汚い山という事で外されたようだった。あのラインホルトメスナーが、富士山を登った時に世界で一番汚い山と言ったそうだ。確かに登ってみると色々な物がゴミとして転がっている。

ある外国人が『日本人は経済は１流だが、モラルは３流だ』と言ったそうだ。それを聞いたある登山家が今、清掃登山を行なっています。そう、今、エベレストの清掃登山（ＣＭ等）おなじみになっている野口建がその登山者である。彼の話だとエベレストのゴミの３分の１は日本の登山隊が置いていった物だと言う事だ。同じ日本人として恥ずかしくなる。それも彼らが清掃登山をしている時期に日本製の酸素ボンベとかゴミが捨てられていたそうだ。知ってか知らずかは解らないが、片方で身に余るゴミで清掃登山を行なっている横でゴミを捨てる人たちがいる。日本人のモラルも地に落ちたようだ。まるで日本社会の縮図が山岳会にも広がってきているようで情けない。

自分が良ければ後はお構いなし。後は誰かがやってくれるだろう。と、身勝手な考え方。よく車を乗っていても煙草の投げ捨て（火が点いたままの物）は歳に関係なくよくやっている人を見かる。
「高そうな車に乗っているのに灰皿は無いのかい」と怒鳴りたくなる。そんな連中の中に山岳関係の人がいないことを祈ります。

私も外国人達にモラルは３流の日本人といわれないように昔から言われている言葉を噛み締めて山行をしたいと思います。
『山には何も残さない。すべて持って帰る。残すのは足跡だけ』の精神で声たかだかに
『山屋は常に紳士たれ』と言いたい。

通りすがりのクライマーひとりごと

八ヶ岳横岳・石尊稜

２００１．３．１１

パーティ　Ｌ本図一統、渡辺聡子、吉田仁

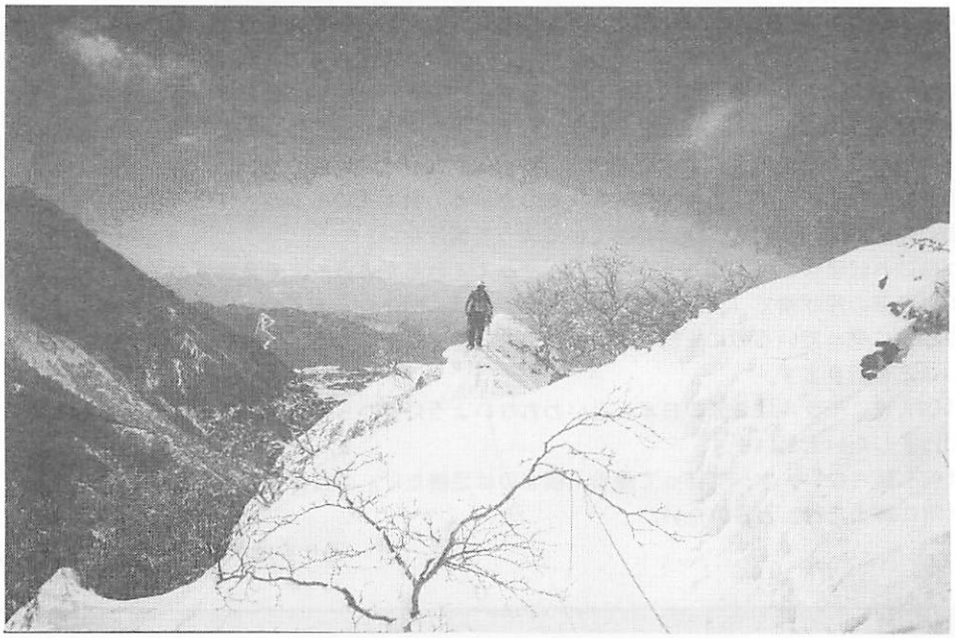
気温が高くなってｉｃｅのシーズンも終わりを告げようとしている。あ～儚く切ない！。傷心山行に八ヶ岳にバリエーションに行くことにした。ここんとこ、あったかくてブルーな日々を送って来たけど、この日の八ヶ岳は今シーズン一番の冷え込みじゃないかってくらい寒かった。鉱泉までのアプローチにある堰堤のｉｃｅ　ｂｏｕｌｄｅｒも、これでもかってくらい太っていた（なんだよ八ヶ岳ならまだ行けんじゃねーの）。

鉱泉の手前で、赤岩の氷柱、大同心の大滝を探すが、雪が多くて確認できない。埋まっちゃったのかな～。ま～今回は、石尊を登りに来たんだから気にしない、気にしない。レスト無しで一気に鉱泉まで来た。超寒い！！トイレに行くと、凍ったうんこのピラミットが出来ていた。私もそれに、一役かって取付きに向かった。先行パーティが、ラッセルしてくれたので、体力温存！手前で追い抜きらくちん到着。あ～ラッセルドロボー！。

１ピッチ目は、凹かくから登るより右寄りのフェースから行った方がいいらしい。ん～たしかに簡単そうだ。しかし取付いてみると意外に細かいぞ！そのうえホールドが雪に埋まっているうえ掃除しながら行くしかない。全然話が違うよ。ところどころ手足同時になったり、足の入れ替えなんかしてる、おかしい、おかしいぞ！石尊でこんなムーブが出てくる訳ない。雪で隠れたホールド探すのも大変、脹ら脛がパンプしてきた。だまされた～（多少脚色）かぶった凹角の手前でピッチを切り２人を迎える。隊長が登って来てこのままロープを伸ばすと、一言告げて左から周りこんで、木登りに入る。あれっ！オレは、てっきりこのかぶりを行くんだと思ってた。周りこんで、のっこしを覗いてみると、激悪！あぶねえ～、あぶねえ～ぞ！吉田仁！！あ～ルートファインディング。その先は、ふつうロープなんて出さないで、トコトコ行けるらしいんだけど、今回は、すべてのピッチをロープ使用。ナイフリッジだって悪かった。その先の２ピッチトラバースなんてもっと悪かった。ん～とても１級のルートとは、思えなかったぞ！。

あと最後に、地蔵尾根のシリセードコース、１カ所無重力になるとこあるから、注意してね～！

（吉田　記）



石尊稜に立つ吉田

谷川岳・一の倉沢・一・二ノ沢中間稜

２００１．３／１７～１８

パーティ　Ｌ笹平孝、渡辺聡子

今回は、スタッドレスタイヤに取り替えた渡辺さんの車で谷川へ向うことになった。ところが、高速道路を走っていると、後ろの方からガタガタと変な音が鳴り始めた。渡辺さんにタイヤのボルトをしっかり締めたか聞いたりしているうちに更に音が大きくなってきたので、近くのパーキングに入り、タイヤを確認してみると、後ろのタイヤがパンクしていた。とりあえず、スペアタイヤに取り替えて出発する。

まだ暗いうちに一の倉沢出合に着くと、テールリッジの上部にはいくつかの明かりが見えた。薄明るくなった頃登り始めて、取り付きで少し迷ったが、少し上がった適当な所から登る。トレースはなく、ラッセルして登って行くので時間がかかる。リッジに出る手前の所で、雪が切れてブロック状になっていて、ここを回り込んだ所からロープを出し、ブッシュを掴んで行った。そして、急なブッシュ帯も念のためロープを出して行った。そのうち後続４人パーティが追い付いて来たので、先に行ってもらう。小ピークに着くと、先ほどのパーティが大休止をしてやたらと時間が過ぎてしまった。先ほどのパーティは、ここからロープを出して行くが、雪の付き方が悪いのか、コルから先の急なブッシュ帯はなかなか進んでくれず、さっきまでの勢いは無くなっていた。のんびりと登っているわけには行かないので、先行パーティの右側のルートをノーザイルで登ってまた先頭になった。ロープを出して順調に進むと、いよいよ核心のナイフエッジに着く。足の踏み場に困るくらいのナイフエッジで、少し緊張しながら通過した。そのうち雪が降り始め、ガスで視界が無くなり始めた。東尾根に出る手前の雪壁で途中ヘッデンを出して、ほとんどホワイトアウトの中、雪庇に注意しながら行くと、突然目の前に東尾根のトレースが現れた。一息ついてから、ビバークが出来そうな第一岩峰まで行く。ここの基部に雪洞を掘って、一食分のラーメンを二人で食べた。

次の日も、相変わらず天気は荒れていてガスっている。ここから先もロープを付けて、第一岩峰は基部を回り込み、ここから急な雪壁を登る。先に行った４人パーティのトレースは、強風のためすぐ埋まってしまった。４ピッチくらいで国境稜線に出た。小屋で残り少ない行動食を食べて、それからホワイトアウトの時の下り方を、渡辺さんに教えてから出発した。赤布が立っていたので気が緩んでしまい、急斜面を下った所でルートから外れたことに気付き、元のルートに戻ろうとしばらく探していたが、結局迷ってしまった。ここからが結構大変で、コンパスを見ながら小屋の近くにある標識まで慎重に登り返した。標識の所でコンパスを合わせて、無事に下りることが出来た。今回の山行では、沢山の反省点があり、また、学ぶ事も出来た。

（笹平　記）

ナイフエッジを行く笹平

安達太良・山スキー

２００１．３．２０

パーティ　Ｌ木村一、松原丈夫、金沢清

心に残る山の１つとして智恵子抄の山、安達太良山をいつかは登って見たいと思っていました。山に対する個人的な意見として、山々が美しく雪化粧した積雪期及び残雪期に登るのが最高と思っている私にとって、スキーが利用できる時期は絶好な登山シーズンとなります。昔からくろがね小屋を基点として山スキーが盛んな山域なので、山スキーを始めた頃から憧れの山でした。今回のメンバーは百名山ハンター松原社長、最近山に再復帰したかっての迷クライマー清チャン、そして私の３名。３名とも昭和２３年生まれの中高年トリオ。松原社長は智恵子という名前には特別な思い入れがあるらしい。何でも初恋の人も名前はチエコとの事。本当かなー？。一方の清チャンは毎日の仕事が忙しくストレスが溜まり、それを解消する為に山に復帰し、更に今年から山スキーを始めたとの事。しかし、いきなりの山スキー本番は無理があるので今回の山行は難儀が予測されそうである。当初の計画ではくろがね小屋経由で山頂に向かう予定でしたが、中高年トリオの我々３人はすぐに安易な方法に流れる癖があるので、ゴンドラを利用して行こうと全員一致で決定。そうと決まれば始発のゴンドラに乗るべく改札口に向かうが意外と登山者&山スキーヤーが多いのに驚く。さすが文明の利器、約１０分で山頂駅に到着。山頂駅を出たところで登高の準備を整えて、スキーにシールを貼り登高開始。安達太良山の山頂が意外に近くに感じられ、約１．５時間の行程と予測される。ゴンドラ山頂駅からは這松帯の中をシールを効かせて進むが、我々中高年トリオは普段の行いが品行方性のせいか今日は風も無くピーカンで絶好の登山日和である。五葉松平付近から山頂へは緩やかなスロープが続きシールが有効に効いて快適な登高が出来る。１０：３０、安達太良山頂直下に到着。ここにスキーをデポして１６９９ｍの頂きを踏むことが出来た。スキーのデポ地点で小休止後シールを剥がして滑降開始。山頂直下の斜面はシュカラブが出来ており、冬は風が強い事を物語っている。緩やかな斜面をテレマークターンで五葉松平付近まで快適に滑降して後ろを振り返ると清チャンが見えないではないか。下で見ていると清チャンはスキーでの滑降は諦めてスキーを背負って降りてくる様子！。程なく追いついた清チャンは第一声

『俺ァー滑れネー』

との事。安達太良の山頂直下から沢沿いに快適な斜面が広がっていたが、清チャンの事を心配して登路を滑降した事は正解だった。五葉松平からは斜面も緩やかになり清チャンもスキーで滑れる斜面になってきたので全員でスキーで滑降する事にした。ブッシュ混じりの斜面を雪面を拾いながら約３０分でゴンドラ山頂駅に到着。ここ

安達太良山山頂にて‥木村と金沢

からはスキー場の斜面を滑降するが、上部は急斜面で狭いスロープなので清チャンは大苦戦。上部斜面では清チャンもスキーでの滑降を放棄した様子だ。更に続く斜面は斜度も緩やかになってきたので清チャンもスキーを再装着してなんとか滑っている。清チャンには申し訳なかったのですが、松原社長と私は先に行かせてもらう事にしてテレマークターンでスキー場のレストハウスまで快適な滑降。レストハウス着１２：００。待つ事２０分。清チャンが合流後ビールで乾杯。今回も大成功、智恵子の山は我々を温かく迎えてくれた。

（木村　記）

会津三岩岳・スキーハイキング

２０００１．３．２４
パーティ　Ｌ木村一、名雪博二

先日購入した雑誌に会津三岩岳の山スキーの記事が掲載されており、その上部はスキーに快適な斜面を提供してくれるとの記事を読み、三岩岳に興味を持ちインターネットで調べたところ、会津駒ケ岳～大戸沢岳～三岩岳～窓明山に至る稜線は山スキーに好ルートと紹介されていました。人呼んで【会津のオートルート】との事。埼玉県の高級官僚名雪氏にメールで前記記事を送ったところ、大戸沢岳が気に入ったらしいが尾根の取付き点が不明なので、今回は三岩岳に決定。これが今回の過ちの発端でした。今回の参加者は名雪氏と２名なので春日部保健所に集合して一路会津を目指す。三岩岳の登山口小豆温泉の駐車場にはまだ雪が２ｍ以上あり、無雪期の駐車場の広さの１/５位しかないがそこに車を止めて仮眠。

翌朝、５：００起床で手早く朝食を採り準備を整えて６：００出発。小豆温泉前のスノーシェッド上の鉄梯子を登ったところでスキーにシールを貼り黒桧沢の右岸をシール登高開始。黒桧沢は下部は水流が出ているので一段と高い所をスキーを滑らすが、左側の尾根上からの雪崩の通り道（ラビーネンツーク）が数本あり、それを渡るのに時間が掛かってしまう。黒桧沢が一段と狭くなったところには左右から雪崩の跡（デブリ）があり、更に右岸の切り立った崖上には今にも落ちそうな不安定な雪が付いているのでこのまま沢沿いには進む気にはなれない。名雪氏も同感らしく

『やばいよ今日は。こっちいくべー。』

と左岸の尾根を指差す。小休止後左岸に食い込む小さい沢状のところを登るがかなりの急登である。シール登高では限界に近く、スキーアイゼンが欲しいところだ。上部に行くに従い更に急になるので

『ここはルートじゃないよー。下ろう』

と下降するが、とてもスキーで下れる斜面ではないのでスキーを脱いで駆け足で下降。黒桧沢はシールを剥がしてスキーで滑降して下降、あっという間に小豆温泉に到着。ここで今後の行動について２人で協議するが、このまま敵前逃亡では軍法会議は免れないとの名雪特攻隊長の意見を尊重して、黒桧沢左岸の尾根にトライすることにした。スノーシェッド手前の斜面から急斜面を尾根に向かってシール登高開始。尾根上に出ると先行者のトレールがあるではないか。やはりここが正規ルートかと再認識しながら狭い尾根上をシール登高を続けると、やがて尾根も広くなりブナの林の中を急登。先行者は大きなザックを背負った単独行者らしい。前半のミスを帳消しにする為にここまで休憩ナシに登ってきたのでここで小休止を取る事にした。まだ三岩岳の頂きは見えないが多少時間が気にかかる。目前の急斜面を登ると傾斜も落ちて、更にブナの粗林になりスキーには滑降の斜面だ。目前には三岩岳から窓明山までの稜線が一望に出来て会津のオートルートの名に恥じない絶好の斜面が広がっている。時間を見ると１２：３０。行動食を採りながら今後の行動を協議するが、このまま登ると三岩岳山頂に着くのは１４：００以降になり、帰りはかなり遅くなる事を覚悟しなければならない。ここで先程の単独行者と話をするが彼はここから会津駒ケ岳まで行くらしいが、その為の装備を持っているのでザックの大きさは我々の倍以上大きい。やはり単独で来るだけに根性の入れ方が違うと２人で感心してしまった。我々は協議の結果、

『天気晴朗なれど山高し』

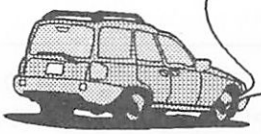
の名雪隊長の一言で涙の特攻中止。そうと決まればここでくつろごうとコンロを出してラーメンを作り、山頂で飲む予定のビールを飲みながらの大休止。三岩岳～窓明山までの稜線には雪庇が張り出しており登高欲がそそられる。名雪隊長はこの稜線がエラク気に入ったらしく来年は是非あそこを縦走したいと言っている。しかし、この静けさはなんだろう？。この大自然の中に我々２人と単独行者の１名が確認できるのみ、ここでは時間がゆっくりと経過しているような気がする。命の洗濯とはこのような事を言うのかも知れないと思いながら、ザックの上に仰向けに寝そべって雲ひとつ無い青空を見上げると、何処へ行くのか白い雲をたなびかせながら飛行機が１台。なぜか遠い昔の頃の思い出が蘇ってきた。

『そろそろ下るべー』

の声に現実に戻されてしまったが、ここ会津の山々には現代の日本人が忘れ去ってしまった何かがあるような気がする。スキーのシールを剥がしていよいよ小豆温泉に

向けての滑降開始。最初はブナの粗林の緩やかな斜面を気持ちよく滑降し、続く急斜面は誤魔化して下降。下を見ると午前中我々が苦闘した斜面が見えるが、我々が躊躇した場所には新しいデブリがありこちらの尾根に転進したのは正解だったらしい。狭い尾根筋を滑降して更に登路最初に出てきた急斜面を下る頃には雪も腐ってグサグサなので斜滑降とキックターンの連続で下降。やっとの思いで国道脇のスノーシェッドの上に到着。１４：１０。帰路小豆温泉の窓明の湯に入ろうとしたが、庶民的な入湯料金ではなかったので会津高原駅付近の夢の湯にて体の汗を流して帰京。

（木村　記）



逆・深夜鈍行（完結編）

《デリー～アグラ～カンプール～パトナ～
カトマンドゥ～カルカッタ～香港～東京》

パーティ　中野融、嶋村幸男、本図一統、イデイスミオ（漢字？）

まず完結編の発行が遅れた事にお詫びいたします。書く気がなかった訳では無く、書けなかったのです。３０年以上も前の事なので、記憶が断片的で、それに加えインドではいろいろな事があったので、頭の中がゴチャゴチャなんです。初めはクラブ内の事だから、面白おかしく書けばいいや、なんて気楽に書き始めたのに、クラブ外にも楽しみに読んで下さる方も何人か現れ、これは出来るだけ正確に記さなければならない、と考えたら気が重くなってしまったのです。運よくここに嶋ちゃんの日記を手に入れる事が出来、やっと書き上げる事が出来ました。

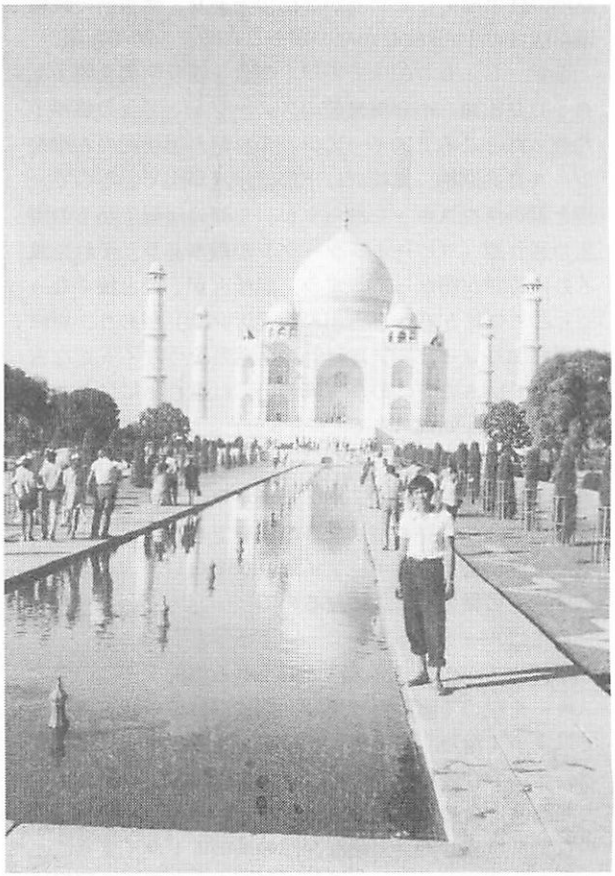
今回はこの嶋ちゃんの日記に照らし合わせて書いていく事にします。

《嶋村の日記》

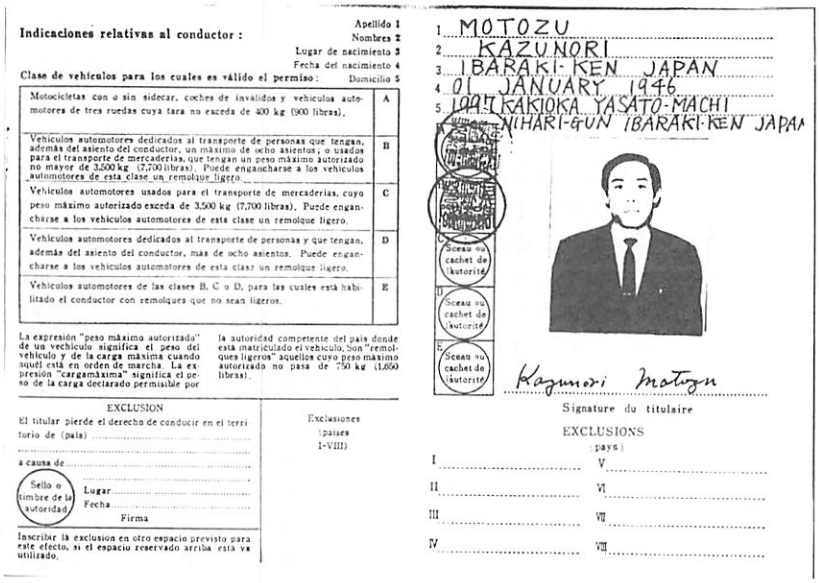
１０月２３日（金）デリー～アグラ～カンプール
緑の続く道は広いが、舗装は１車線分だけなので、大型車が来ると、わきの砂利道に入り猛烈な砂ぼこりをあげる。道のわきには車にはねられた動物の死骸がたくさんみられた。ハゲタカらしき鳥が死骸をつっついている時もあった。アグラのタジマハールを見学してからさらに進み、カンプールに泊まる。宿は小ザッパリした所で扇風機もあり、クーラーまでついていて気持ちよく眠る。

暑いデリーを離れる日が来た。同宿していたイデイさんもカトマンドゥに行くという。我々の車に４人は乗れるのでイデイさんも同乗は可能だが、車の調子は悪く、ラジエーターからはかなりの勢いで水が漏っている。はたしてカトマンドゥまで行き着けるか疑問もあり、「イデイさんも車に乗っていかない？」と喉まで出かかっていたが、誘うことができなかった。イデイさんも単身で陸路だったか空路だったか忘れたがカトマンドゥに向かうことになった。

嶋ちゃんの日記と少々食い違うが、デリー～アグラ間はコンクリート舗装（アスファルトではない）の２車線で、我々が通ったインド国内の道路では一番良かった。おそらくアグラから先のことを書いているのだと思う。アグラといえばタジマハールというほどの有名観光スポットだから、標識がいたる所



タージ・マハールにて‥〔本図〕



Indicaciones relativas al conductor :

Apellido 1
Nombres 2
Lugar de nacimiento 3
Fecha del nacimiento 4
Domicilio 5

Clase de vehículos para los cuales es válido el permiso :

Motocicletas con o sin sidecar, coches de inválidos y vehículos automotores de tres ruedas cuya tara no exceda de 400 kg (900 libras).	A
Vehículos automotores dedicados al transporte de personas que tengan, además del asiento del conductor, un máximo de ocho asientos; o usados para el transporte de mercaderías, que tengan un peso máximo autorizado no mayor de 3,500 kg (7,700 libras). Puede engancharse a los vehículos automotores de esta clase un remolque ligero.	B
Vehículos automotores usados para el transporte de mercaderías, cuyo peso máximo autorizado exceda de 3,500 kg (7,700 libras). Puede engancharse a los vehículos automotores de esta clase un remolque ligero.	C
Vehículos automotores dedicados al transporte de personas y que tengan, además del asiento del conductor, más de ocho asientos. Puede engancharse a los vehículos automotores de esta clase un remolque ligero.	D
Vehículos automotores de las clases B, C o D, para las cuales está habilitado el conductor con remolques que no sean ligeros.	E

La expresión "peso máximo autorizado" de un vehículo significa el peso del vehículo y de la carga máxima cuando aquél está en orden de marcha. La expresión "cargamáxima" significa el peso de la carga declarado permisible por la autoridad competente del país donde está matriculado el vehículo. Son "remolques ligeros" aquellos cuyo peso máximo autorizado no pasa de 750 kg (1,650 libras).

EXCLUSION

El titular pierde el derecho de conducir en el territorio de (país) .....

a causa de .....

Sello o timbre de la autoridad

Lugar .....
Fecha .....

Firma

Inscribir la exclusion en otro espacio previsto para este efecto, si el espacio reservado arriba está ya utilizado.

Exclusiones (países I-VIII)

1 MOTOZU
2 KAZUNORI
3 IBARAKI-KEN JAPAN
4 01 JANUARY 1946
5 1997 KAKIOKA YASATO-MACHI NIHARI-GUN IBARAKI-KEN JAPAN

Sceau ou cachet de l'autorité

Kazunori Motozu

Signature du titulaire

EXCLUSIONS (pays)

I ..... V .....
II ..... VI .....
III ..... VII .....
IV ..... VIII .....

自動車国際免許証

にあり迷うことはない。私たちの顔を見ると、物乞いの少年少女達が走り寄ってくるのは何処でも同じだ。正しくはタージ・マハールというらしい。ムガール帝国皇帝シャー・ジャハーンが、愛妃を偲んで建てた大理石の大霊廟である。料金は忘れたが、いくらかの見学料を払い中に入ると、外の喧噪とは対照的な静けさがあり、久しぶりにホッと一息つけることができた。インドにもこんな落ち着ける所があったのだ。アグラから先は、嶋ちゃんの日記の通り舗装は車一台分だけである。ラジエーターの水漏れはかなりひどく、３０リットルの水を持っていてもすぐに無くなってしまう。道路の傍らに井戸を発見すると汲むのだが、我々の体も水を要求している。真っ白く濁った水は、１時間もそっとしておけば固形物が沈殿するので見かけは奇麗にみえるが、含まれる細菌類までは除去できない。もう何日も下痢が続いているが意を決してこれを飲む。いや、飲むほかないのだ。嶋ちゃんも体調がイマイチだと言う。元気なのはトオルちゃんだけだ。カンプールで泊まった宿は我々の利用した中ではたしかに快適だったが、ベッドに南京虫がいたのには閉口した。

《嶋村の日記》
１０月２４日（土）　カンプール（９：５０）
～パトナ〈パンク修理１ルピー〉
パトナに着いた。金も残り少なくなってきたので、できるだけ安そうな宿をと思っていたのだが、なかなか見つからないため意を決してプリンスホテルに入る。恐る恐る料金を聞く。
『一人１０ルピーです』
"万歳"を心にとどめお願いします、と言ってさっそく室に案内してもらう。ひどい！！部屋の壁という壁に蚊が張り付き、ヤモリが数匹へばりついている。しかし悲しいかな上手く断ることができない。金も払ってしまっているので我慢する。中野さんと本図さんの二人が一室、僕が一人で一室という具合に別れれば良かったのだろうが、わがままをしてしまい、ヤモリの部屋に中野さんを一人入れてしまった。しかし我々も、部屋の電気を消すとすぐに襲いかかってくる蚊の大群との戦いに、ほとんど一睡もせずに終わってしまった。

日記にはカンプール発９時５０分とあり、おそらく出発前にパンクを修理していたのかもしれない。カンプールから印ネ国境に向かう方法には、

その１、カンプールでガンガーを渡河し、ラックノー、ゴラクプールを通りラクソールへ向かう最短ルート。

その２、アラハバードで渡河し、沐浴で有名なバラナシから北上する一番面白いと思われるルート。

その３、パトナまで行き、その先のモカマで渡河し国境に向かう最も長いルート。

以上の３本のルートが考えられる。我々はその３を選んだ訳だが、その理由は覚えていない。もしかすると車の故障と関係あったのかも知れない。私はバラナシで沐浴風景を見たのかどうかの記憶もない。バラナシを通ったのかどうかすらも分からない。嶋ちゃんの日記に記載がないので、バラナシは通らずガンガーの南の道を行ったのだと思う。その後テレビ等で沐浴風景などを見ているので、テレビでみたのか実際にみたのか記憶では分からなくなってしまっているのである。

夕方パトナに近づいた頃異様な光景を目にした。通りかかった村の人達が一斉に表に出て来たのである。それは３人から７～８人のグループになって、しかも男女に分かれているのだ。みんな片手には直径１０センチ位の

壷を持っているのである。暗くなる寸前であった。はじめ私はお祭り事でもあるのかと思ったが、そうではないらしい。なんかヤブの繁みに一人づつ入って行くのである。そう、寝る前のトイレなのだ。一人が用を足している時は他の人は見張り番なのである。インド人はトイレットペーパーを使わず、不浄の手である左手で始末をする。持っている壷には水が入っており、それでその手を洗うのであろう。暗くなってしまうとヤブの中には入れないので、路肩や鉄道の線路で用を済ますようだ。これで謎が一つ解けた。インドでは幹線道路といえども路肩は歩けない。なぜならば人間の物と思われるウンチがゴロゴロしているからだ。初め私は犬のフンだと思っていた。しかし犬のフンにしては腑に落ちない点があったのだがこれで解決したのだった。

《嶋村の日記》
１０月２５日（日）
パトナ(７：４５)＝７５８６７ｋｍ
mokameh(９：５０)＝７５９７５ｋｍ（渡河地）
ラクソール（インド側国境の町）ビルガンジ（ネパール側 国境の町）
カトマンズ（２２：３０）＝７６３３５ｋｍ
雨に濡れたカトマンズの街は酷暑のインドから来た体にはオアシスのごとき感有り。

結局インド国内では一回も野宿をせずに済んだ。いや、出来なかったと言った方が正しい表現である。油断すると身ぐるみ持っていかれてしまうという恐怖感と、マラリヤが怖かったからだ。しかし宿に泊まっても、蚊の大群にはいつも襲われていたので、マラリヤに関しては野宿しても同じだったのかも知れない。きっとマラリヤの予防薬は飲んでいたのだと思うのだが。

ここで日記の説明をしておくと、パトナ発７時４５分で車の走行距離メーターは７５８６７ｋｍという意味である。mokamehとあるがこれはmokamaという町の事だと思う。

一睡もできず早立ちする。約１００ｋｍ先のモカマでガンガーを渡る。ガンガーの流れはお世辞にも奇麗とはいえない。日本の河川とちがって上流に氷河のある川は濁っているものだ。それにしてもきたない。泥水のように見える。しかし、これが聖なる河ガンジスなのかと思うと感無量である。午後遅くなって印ネ国境の町ラクソールに到着した。何をする為に居るのかわからないが、暇そうな人夫らしき人達でごったがえしていた。ここしばらく腹の調子が悪い私は、インド人に負けないくらい野っ原で用を足してきた。なんとここにはトイレがあるではないか。すぐに飛び込む。板塀のお粗末なものだが無いよりましである。もちろんトイレットペーパーや電灯がある訳ない。真っ暗な中、目を凝らすとやっと便器が見えてきた。想像を絶する汚さで、足をおく場所も無くちょっと躊躇したが、外の人混みの中でやる勇気はないので意を決してやることにした。日本式の型で、しばらく屈んでいると目が暗闇に慣れてきた。すると壁に落書きがしてある。へ～え、どこの国も同じだなあ、と期待を込めてその絵を見始めた。おそらくトイレの落書きのジャンルなんて万国共通だと思ったからである。だがどうもおかしい。なにが書いてあるのかわからない。だいたいトイレの落書きってＨなものが相場だが、頭を横や斜めにしてもわからない。そのうち目がさらに慣れてきて私はハッと気がついた。その絵はまるで油絵のように幾重にも塗りたくられていたのである。それも４方に、ドアまでびっしりと。なんとそれはすべて人間様のウンチだったのだ。インドの人達は紙を使わない。国境にくるのに壷を持ってくる人もいないだろうから、左手で始末した後は壁になすり付けるのである。一気に気分が悪くなり吐き気を催してきたので外に出ようとするが、先ほど入る時、掴んだドアの取ってまでくっついているので触ることができない。足でなんとか開け、脱出することができた。何ヵ国を歩いてきて分かったことだが、トイレにはその国の文化があるのだ。

ビルガンジ（ネパール側国境の町）に入ったのは夕暮れ間近になっていた。国境通過に２時間くらい要したが、それでも中近東あたりよりはずっとましだ。このまま夜を徹してカトマンドゥまで行くことにした。近くの井戸でラジエーターの水を３０リットル補給した。しかし水の漏れ方から想像するに、３０リットルではカトマンドゥまでは持たないだろう。途中で補給が必要になるだろうが、真夜中にそれが可能かどうか不安もあった。しかし我々には前進するのみの選択肢しかなかった。道は舗装と未舗装と半々だったように記憶している。ときどき対向車があったが、寂しい真っ暗な道を登っていく。一度道を見間違えて谷底に転落しそうになった。カトマンドゥへの峠道はカイバル峠よりも厳しいものだった。もしかすると、車が故障していたので余計にそのように感じたのかも知れないが。これでもかこれでもかというほど登っていく。いくつかの峠を越したようだが、昼間であったらさぞかし眺めも良かったんだろうに、今思うと残念ではある。だいぶ高度を上げたためだろうか、車窓から入ってくる風が清々しい。やっと登り切ったようだ。峠の名前は忘れてしまったが、これでカトマンドゥに行ける見通しがついた。下りはそんなに降りずにカトマンドゥ

校外に入った。ということはカトマンドゥの標高が高いうことであろう。並木道に街灯がついている。人、人、人のインドとちがって人っ子一人いなく静かだ。涼しい！涼しい！を連発する。酷暑のインドと比べると正にここは天国であった。嶋村の日記には２２時３０分着と記してある。トオルちゃんと

『この車が３００ドル（１０万８千円）で売れればいいんだけどね。もし売れなかったらどうしようか。トレッキンングするくらいの金は残っているけど、ホテル代やカルカッタまでの飛行機代は無いね。まあなるようになるべ～』

などと話し合う。この時間でこのまま市内に入っても宿はとれないので今晩は郊外で野宿することにした。

１０月２６日（月） 嶋村の日記は記載なし

早朝起きると同時に市内を目指して車を走らす。ホテルを探すためである。このとき既に泊まるホテルはラリグラスと決めてあった。このホテルはツエルマットで偶然会った田部井淳子さんに教わったホテルである。田部井淳子さんは、このとき確かアンナプルナの帰りだったと記憶しているが、このホテルを利用してきたと言って紹介してくれたからである。田部井さんはこの後エベレストを登り超有名人になってしまった。ラリグラスはすぐに見つかった。フロントで、

『こんにちは、泊まりたいのですが』

『はい、いつまで』

『たぶん２週間か３週間くらいになると思います』

『はいわかりました』

応対に出た若主人はさらに聞いてきた。

『ところであの車はどうするのですか？』

『売るつもりです』

『いくらで売るのですか？』

『３００ドルです』

『よし、では私に売ってください』

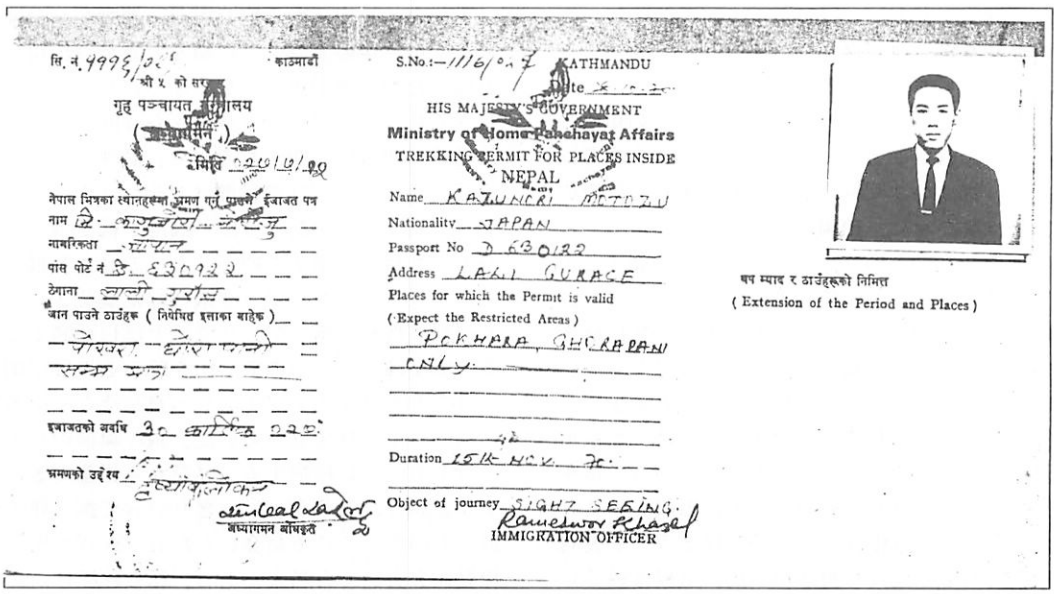
『いいですよ』

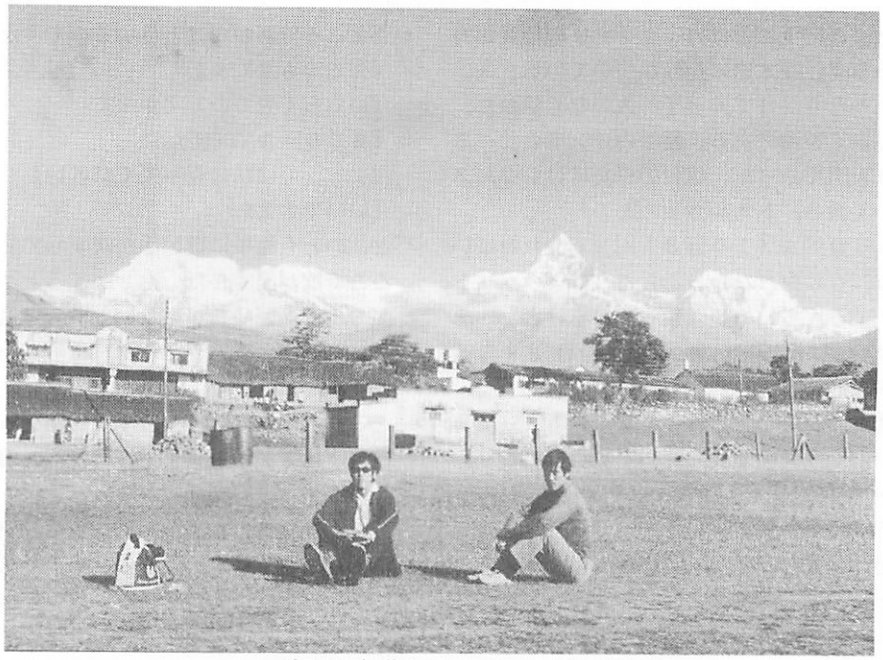
と、いとも簡単に買い手が決まってしまったのである。ここで欲が出てきた。もしかするとネパールでは相場がもっと高いにちがいない。もっと高く売れるのではないかと欲がでてきた。明日に町に出て調べてみることにした。

このホテルは他にも日本人が泊まっており、多くの日本遠征隊が利用しているようだ。田舎から出てきて、このホテルに泊まりながらカトマンドゥの学校に通っているという、ネパールでは金持ちの息子らしい子供が、あれやこれやと英語や日本語で話しかけてくるのだった。今日は久しぶりにホテルで水シャワーを浴びた。寒かったが非常に気持ちよかった。この世の中に寒いということがあることさえ忘れかけていた。

《嶋村の日記》 １０月２７日（火）　ロイヤル・ネパール・エアラインにて２９日発のポカラ～カトマンドゥ往復航空券購入。千葉工大ＯＢ関氏（北岳バットレス、奥穂等で会っている）にバンク、イミグレーションオフィスなどに案内してもらう。

ポカラに行く目的は、ヒマラヤの展望台と言われるゴラパニバスへトレッキングをするためである。カトマンドゥからポカラまでは、今は陸路で行けるらしいが当時は空路しかなかった。日記に書いてあるトレッ


काठमाडौं
S.No.:-
KATHMANDU
Date
HIS MAJESTY'S GOVERNMENT
Ministry of Home Panchayat Affairs
TREKKING PERMIT FOR PLACES INSIDE
NEPAL
Name KAZUNORI MOTOZU
Nationality JAPAN
Passport No D 630122
Address LALI GURAGE
Places for which the Permit is valid
(Expect the Restricted Areas)
POKHARA GHORAPANI
ONLY.
Duration 15th NOV. 70.
Object of journey SIGHT SEEING.
IMMIGRATION OFFICER
Rameswor Khaseel
थप म्याद र ठाउँहरूको निमित्त
(Extension of the Period and Places)



ポカラ空港にて…本図、中野

キングパミッション取得の手続きとお金の両替を済ませてから町にでた。
航空チケットは往復で１６６ルピーだった。カトマンドゥにはヒッピーが非常に多い。バイヤーみたいな奴に、『この車を売るのか？』と何回も声をかけられる。
『いや、売るつもりはないけど、おまえがそんなに欲しいんだったら売ってやってもいいぞ』
と、もったいぶりたいが、悲しいかな私の語学力ではどれだけ通じるか疑問である。こちらが売りたいという態度を見せないで高くふっかけるためだ。
『うん、売るよ』
と言ってしまうのが精々だ。
『いくらで売るんだ』
『３５０ドルではどうだ？』
『だったら買ってもいいよ』
と、いとも簡単に買い手がついてしまう。この車は３５０ドルでも売れることがわかったので、次の所では４００ドルに吹っかけてみた。しかし、それでは買い手はみつからなかった。相場は３５０ドルといったところのようだ。まず感じたのはエンジンの調子なんかよりも、見たくれの良いのに高い値段がつくのだ。一部錆びが出ていたので、どこでもそのサビを指摘された。ラジエーターの水漏れなんぞは全く気にしていないようで、直してから売るというと、そのままで良いと言われる。なぜか聞いてみると、そのほうが税金が安く済むのだそうである。ヨーロッパで中古の車を買い、ネパールで売るのを商売にしている奴もいるとか聞いた。そいつらの車は、エンジンはどうでも表向きはとても良い車に見える物ばかりだ。気候は過ごしやすいし、物価は安いし、ヒッピー達が集まるのが頷ける。
カトマンドゥの町並みはテレビや映画で見たそのままの姿であった。

《嶋村の日記》
１０月２９日（木）　カトマンドゥ１１時２０分発・ ポカラ１３時００着？ロイヤルヒマラヤホテルにて五百沢智也氏に会う。氷河末端の状態を把握しておく為に、飛行機をチャーターして写真を撮り、１２月帰国予定との事。

シャモニを出てから約２カ月、運動らしい運動をしていない。車のトランクに積んできた登山用具がやっと役にたつときがきた。久しぶりにザックを肩にホテルをでた。カトマンドゥ空港からは回りの山が良く見渡せる。四方山に囲まれており、盆地になっているようだ。我々の乗った飛行機は、それはそれは小さくて３０人乗りくらいだろうか。高度が低く飛ぶので景色がとても良く、途中の峠ギリギリの高さで飛ぶので幾分スリルもあった。ポカラ飛行場は舗装されていなくて草原に降りる感じだ。ヒマラヤは日が高くなってくると雲が沸いてくるので、山を眺めるのは早朝に限る。ポカラからはマチャプチャレが登高欲をそそる姿で天に向かってそびえ立っていた。飛行場前のロイヤルヒマラヤホテルに投宿する。名前から想像すると高級ホテルと思うだろうが、はっきりいって掘っ建て小屋に近いものだ。ここでお会いした五百沢智也氏は、元独標登高会会員で有名人である。私も独標登高会編「八

ヶ岳研究」という本で名前だけは知っていた。国土地理院に勤めていて、その研究だったのか？氷河の調査をしているとおっしゃっていた。この結果は後に岳人に連載で発表されていた。現在は退職して山形にいるらしい。明日からトレッキング開始だというのに、一番元気だったトオルちゃんがおかしくなってきた。食欲もなければ下痢もしているという。熱も出てきた。ちょっと心配である。

１０月３０日（金）、３１日（土） 嶋村の日記には記載なし

３０日、トオルちゃんの具合はかなり悪く高熱が続いている。今日出発予定のトレッキングどころではなくなってしまった。五百沢さん達が心配してきてくれた。診療所に連れていくほかあるまいということになった。しかし診療所までは病人が歩いて行ける距離ではないので車を探さなければ。ポカラにタクシーなどあるわけないから、ジープをチャーターした。診療所にはフランス人のスタッフがいた。残念ながら３人合わせても英語で細かい症状までは言えるほどの語学力は持ち合わせていない。ジェスチャーで表現するも限界がある。

『フランス語は？ドイツ語は？』

を聞いてくるが、英語がだめなのに他国語が話せるわけはない。でも苦労しながらなんとか症状を伝えることができ、薬をもらうことができた。治療代はたしか『お気持ちで・・』ということだったと記憶している。おそらく日本でいえばジャイカみたいな、外国の協力隊なのであろう。だからお金のない人からは治療代はもらわないのだと思う。

ホテルに戻ってから嶋ちゃんと相談の結果、トレッキングは中止せざるを得まいと言うことに結論をだした。嶋ちゃんと二人でホテル近くをブラブラして過ごした。

３１日、トオルちゃんの具合も良くなってきたのでカトマンドゥに戻るため明日のフライトを予約する。結局ヨーロッパを出てから一本の山も登れずここまで来てしまったわけだが、私には近い将来又ヒマラヤに来るぞという気持ちがあったので、それほど悔しいとは思わなかった（帰国後おやじが急死し、この夢は断たれてしまったが）。ポカラから北を見るとマチャプチャレの鋭鋒がいつも天を突き刺している。登高欲に駆られるが、この山は宗教的な理由から登山禁止である。以前イギリス隊がアタックしたが、そういう理由から頂上直下で戻ったという報告がある。でもそれはウソであろうことは岳人なら誰でも想像はつく。そしてアンナプルナがあり、ダウラギリも少し見えた。しかしそれは早朝だけで日中になると必ず雲が湧き見えなくなってしまうのだった。

SALE AGREEMENT.

Date 2- nov 1970

I JAPANESE KAZUNORI MOTOZU, PASSPORT NO. D630122, VISA NO. 3376, 027, has been sold my motor car (OPEL) to Mr. INDRAMAN SHERCHAND for Rs. 3000.00 (Rupees Three thousand).

Details of the Motor Vehicle is as under :-,

Identity Mark on the plate - 200-Z-3532

CHASSIS (MARQUE - OPEL
(NUMBER - 380577704

NUMBER OF CYLINDERS - 4

ENGINE NUMBER - 10S-0102079

STROKE - 986 CCM.

SHAPE - 48.

COLOUR - BEIZE&SCHWARZ

No. OF SEATS - 5

Signature and Address	Signature of Buyer,
MR. KAZUNORI MOTOZU,	MR. INDRAMAN SHERCHAND,
1997KAKIOKA YASATO,	c/o HOTEL LALI GURAS,
NIIHARIGUN,	640, DILLIBAZAR,
IBARAKI, JAPAN.	KATHMANDU - 21, NEPAL.

マイカー売買誓約書

《嶋村の日記》 １１月１日（日）　ポカラ発１０：００カトマンドゥ着１０：４０。マナスル三山、ガネッシュヒマール、ランタンリルン、奥の方にゴサイタンらしき山を見る。ガウリンサンカールの許可が出そうだが同志会でどうかと雲稜の人達に言われる。

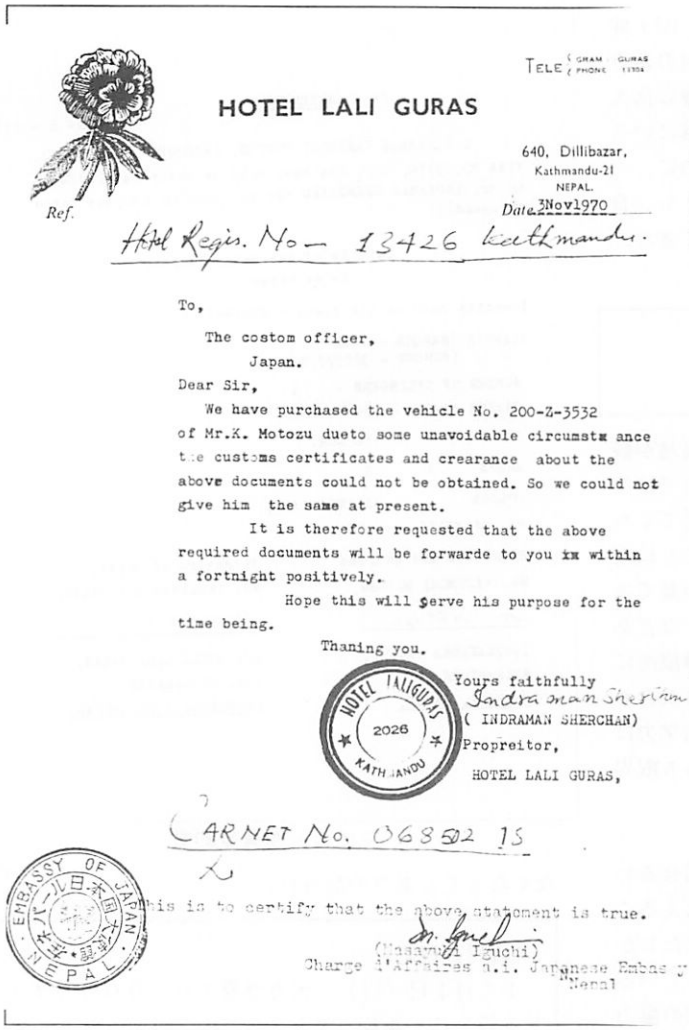
五百沢さんたちと挨拶を交わしてポカラを離陸する。午前中のフライトだったので山が良くみえた。

カトマンドゥに戻り、ラリグラスでイデイさんと再会する。イデイさんに、

『なんで俺を車に乗っけてくれなかったんだよう、俺はみんなと一緒にネパールまで来たかったのに』

と泣きつかれたが、こちらの事情を話し、申し訳無いことをしたとあやまった。途中で故障して行動不能となるにしても誘うべきであった。このホテルには日本人遠征隊がいくつか滞在していたが、宿に残っているのは連絡隊員だけだった。

いよいよ帰国の準備にとりかかる。まず車を売らねばならない。この車が売れないことにはインドまでの航空チケットはおろかホテル代も払えないからだ。すでにこのホテルのオーナーは３００ドルで買うといっている。なんとか４００ドルで売りたいと考え、トオ



TELE GRAM GURAS / PHONE 13354

HOTEL LALI GURAS

640, Dillibazar,
Kathmandu-21
NEPAL.

Ref.

Date 3Nov1970

Hotel Regis. No— 13426 Kathmandu.

To,

The costom officer,
Japan.

Dear Sir,

We have purchased the vehicle No. 200-Z-3532 of Mr.K. Motozu dueto some unavoidable circumstance the customs certificates and crearance about the above documents could not be obtained. So we could not give him the same at present.

It is therefore requested that the above required documents will be forwarde to you within a fortnight positively.

Hope this will serve his purpose for the time being.

Thaning you.

Yours faithfully
Indra man Sherchan
(INDRAMAN SHERCHAN)
Propreitor,
HOTEL LALI GURAS,

HOTEL LALIGURAS 2026 KATHMANDU

CARNET No. 068502 15

This is to certify that the above statement is true.

(Masamichi Iguchi)
Charge d'Affaires a.i. Japanese Embassy
Nepal

EMBASSY OF JAPAN NEPAL 大使館

出国証明書

ルちゃんを宿に残し町にでてみた。だれだったか忘れたが、語学の達者な人が同行してくれることになった。きっかけは何だったか思い出せないが、やがて役人か会社の重役みたいな人と商談が始まり、試乗することになった。お客を乗せカトマンドゥ市内で一番広い4車線の通りに出た。そこでスピードのでるところを見せようとおもいっきりアクセルを踏んだ。１００キロ位に加速したとき、右の方から子供が数人道路に飛び出してきた。追いかけっこでもしているようだった。急ブレーキを踏んだが間に合わない。

『ああ！だめだ！ひいちゃう！』

キーキー（急ブレーキの音）だれもがそう思った。しかしなんと運が良いことだろう。車は子供達の間に入り込んだのである。あと０、１秒早くても遅くてもどちらかの子供をはねてしまっただろう。私はその瞬間足がガタガタと震え、暫くの間運転することができなかった。そのとき同行してくれた彼がこう言った。

『これでこの車のブレーキがきくのがわかったでしょう』

一同どっと笑いが起こったが私は笑えなかった。商談は３５０ドルなら買ってもいいとのことだったので、ひとまずホテルに帰ってトオルちゃんと相談することにして別れた。

１１月２日。

私は昨日のことで一気に疲れてしまい、値段なんてどうでもよくなっていた。このホテルと売買の口約束はしていることだし、面倒だから３００ドルでここのオーナーに売ってしまおうということにした。話がきまれば商談はトントンと進み売買契約は成立した。この車に関してはオーナーの息子（若社長）が非常に乗り気で、契約成立は満足そうだった。

『現金はルピーがいいですか・ドルがいいですか？』

とオーナーが聞いてきたので、少々のルピーと後はドルをキャッシュでもらった。私はオーナーに、ドイツからずっとつけてきた楕円形の旅行者用ナンバーと、カルネを手続きが終わり次第、直ちに日本に送ってくれることを頼んだ。

［カルネとは、一口に言うと通関手帳の事で、ヨーロッパ諸国では必要ないが、発展途上国などの国境を通過する際必要になることが多く、一年間有効である。ちょうど回数券みたいになっていて、国境を通過する際に一枚づつ切り離して使っていくもの。］

しかし、このオーナーはついに送ってはくれなかった。まあ、お国柄からアテにはしていなかったけど。

ドイツで３５０ドルで買って、２４０００キロを走り３００ドルで売れれば善しとするほかあるまい。しかし、実際にはパリとマルセイユでの修理代を加えると６～７００ドルになっているかも知れない。ドイツで買ってから１４カ国、２４０００キロメートル、故障はしたけどよく走ってくれた。名残惜しかったけど、ここでオペルカディット１０００ｃｃに別れを告げた。

１１月３日

ラリグラスの主人と日本大使館に行き、私たちが出国するときトラブラないよう（入国は車で入っているので）書類を作って手続きを済ませる。

３００ドルを手にしたのでカルカッタまでのチケットを買うことにした。１１月４日発インディアン・エアーラインのチケットを購入した。一人３３２ルピーだった。イディさんも日本まで我々と一緒に帰ることになった。

日本を出るとき親戚や友人に餞別をもらったので、何かお土産を買っていかなくては申し訳ない。３００ドルを手にしたので、トオルちゃんは、ちょっとはお

金の余裕があるから少し高いお土産を買ってもいいよと言ってくれたが、そういうわけにもいかず５０円のショルダーバッグを数個買った。それとスペインで買ってきた５０円の火縄式ライターがいくつかあるのでそれを土産とした。今まで、彼らのふところをあてに日本から来て、タカリの生活をしていた（実際にはほんの少々だったが）私には、とても「金をくれ」とは言えなかったのである。

トオルちゃんの体調は薬が効いたのか、ほとんど回復していた。

《嶋村の日記》
１１月４日（水）　カトマンドゥ発１３：５０－カルカッタ着１６：１５

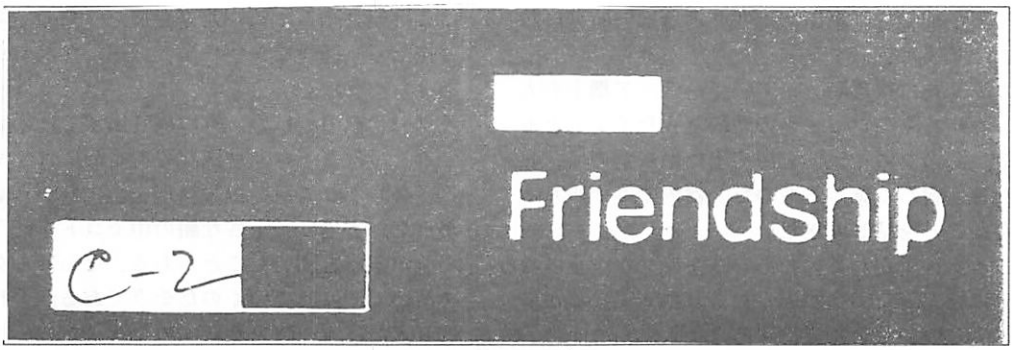
いよいよこの長旅も終盤を迎える。車が手元からなくなるとなんか身軽になった気分だ。我々４名を乗せた飛行機はカトマンドゥを離陸した。ヒマラヤの山々が遠のいていく。再びこの地にくるのはいつだろうか。機種はフレンドシップといい、現在はもう飛んではいないと思うが、主翼が胴体の上にあるため眺めが非常に良い飛行機である。インディアン・エアーラインのスチュワーデスは民族衣装でなかなかである。いつのまにか眼下は灼熱の大地が広がっていた。カルカッタに降り立つとムーっとした熱風と独特の匂いがした。またあのインドに戻ったことを実感するのだった。

カルカッタで泊まるホテルはリットンホテルと決めていた。ここも田部井さんに教わったホテルである。沢木耕太郎の"深夜特急"によると、後に彼もこのホテルを利用したようである。

リムジンバス（今の日本のリムジンバスを想像してはいけない）に乗り市内のバスターミナルで降りた途端にワーと人に囲まれる。小学生位の年齢から大人までいろいろで、勝手に荷物を持っていってしまう。やっぱりインドだ気をつけようぜ、と言いながら荷物を確保するのがやっと。彼らは荷物をかっぱらうのが目的ではない。荷物を運んでチップを貰いたいのだ。

『ホテルは決まっているのか』
『決まっているよ』
『どこのホテルに行くんだ』
『リットンホテルだ』
『ああ知っているよ、俺にまかしておけ』
『いや、俺だって知ってるから俺にまかせろ』
みんな勝手に荷物を運ぼうとするからシッチャカメッチャカで、何がなんだか分からなくなってしまった。そのうち力車のおやじが
『一人だけ乗ってくれればその荷物を全部乗せてもいいよ』
と言ってきた。
『いくらだ』
『〇〇ルピーだ』
『それは高すぎるからダメだ』
本当は相場なんかは知らないのだが、かならずふっかけているに違いないのだ。
『では△△ルピーでは？』
すぐ半分の料金になってしまう。まあ妥当と思われる料金なのでそうすることにした（後で分かったことだが、これでも通常料金の倍だった）。トオルちゃんが乗り、私と嶋ちゃんとイデイさんで荷物を持っていかれないよう力車の両脇についた。バスターミナルからリットンホテルまでは結構な距離だったような気がする。暑い、臭い、うるさい、汚い、カルカッタというところは、こりゃデリーどころではないなと実感する。ホテルに着き『はい』と言って料金を払おうとすると
『ノー、ノー、◎◎ルピーだ』
とおやじは言い出した。
『ばか言ってんじゃねーよ、おまえさっき△△ルピーって言ったじゃねーか。これしか払わねーよ』
と日本語で突っぱねた。我々だって半年も学習をしてきたんだ。インドはすべてこうなんだってことくらいは百も承知なんだよ、このバカめが。

リットンホテルは我々が利用してきた中では高級だった。決して高級ホテルではないのだがドミトリーと比べるとやはり高級に感じた。



まあまあ安心できるホテルなので、荷物をおいたまま外出できる。夜、町に出てみた。ホテルの周りのあまりの汚さに驚いた。ちょっと暗い歩道はウンコと小便で歩けないのでなるべく車道の中央寄りを歩く。人の多さに暑さも加わって強烈な匂いである。その中に寝ているのか死んでいるのか不明だが横になっている人もたくさんいた。すぐ物乞いに囲まれる。一目で栄養失調とわかる子供を抱いた母親、近寄るのもためらうほど全身に潰瘍ができた人、今晩寝るところがあるのだろうかと心配になるような子供達が裸足で後をついてきて離れない。露店商が立ち並び、売っているものは殆どまがい物ではないかと思う。値段は交渉すれば半額になるのは当たり前、３分の１いや５分の１が正規の値段だろう。ものすごい活気で、これだけの人間が何を目的に行動しているのだろうか。なんの当ても無くただブラブラしている人ばかりに見える。付きまとわれてゆっくりしていられないので早々にホテルに戻った。

１１月５日。

エアーインディアのオフィスに行き、羽田までの予約をする。カルカッタ～東京間のオープンチケットはカルカッタ発６日、香港に一泊して東京着８日と決まった。香港まではエアーインディア、香港から羽田まではＪＡＬに決めた。嶋ちゃんはすでにボンベイ（現在のムンバイ）～羽田間のオープンチケットを持っており、羽田には我々と同時刻頃に着く飛行機を予約した。

インドを離れる最後の夜、町に出た。余った小銭をすべて物乞いさんたちに分けてあげた。貧乏旅行の私たちだから、余り金なんていくらもなかったが、記念コインを少し残して全部差し出す。子供達もしっかりしたもので、片手で受け取るともう片方の手を出したり、いったん離れてからまたよって来て手を出すといったあんばいだ。これで一個のパンにでもありつければ幸いである。

１１月６日。

くるときと同じような騒ぎをしながらバスターミナルに向かう。嶋ちゃんとは羽田での再会を約束して空港で別れる。嶋ちゃんはボンベイに向かうのである。ボンベイで１泊して、羽田には我々とほぼ同時刻に着こうという考えだ。

カルカッタを午後離陸、エアーインディア機上の人となる。カルチャーショックの連続だったインドともお別れだ。あんなにインドを早く出たかったのに、お別れとなると寂しく感じるものだ。機内でトオルちゃんがこんなことを話してきた。

『たんちゃん、予定していたトレッキングが中止になったので、車を売ったお金が思ったより残っているから香港では少しいいホテルに泊まろうよ』

『どのくらい残ってるの？』

と俺は聞いたはずだが、教えてくれた金額は忘れてしまった。

『じゃあ、一流とはいかないが二流には泊まれるな、よしそうすっべ』

夕刻エアーインディアは無事香港に着陸した。香港空港は町の真上をビルをかすめるようにして飛行機が離着陸する。機内からの眺めはいいが恐ろしくも感じる。

諸手続きを済ませ外に出た途端客引きに捕まる。香港ではインフォメーションでホテルを探すと決めていた我々は、それを振り切ろうとするも彼らも諦めない。名刺を差し出し

『私はここのホテルの者ですが、繁華街も近いし、眺めも良く、グッドなホテルですからぜひ泊まってください』

名刺には"金殿"酒店式装置、旅客理想高尚住所・・なんて書いてある。酒が飲めて、お客が満足いくような場所にあります、てな意味なんだろうか。まったく相手にするつもりはなかったのだが

『ふ～ん、で、いくら？』

と聞いたのが運の尽き。相手はプロ、俺たちは素人、うま～くだまされてしまった。

『〇〇ドルです。車でホテルまでご案内いたします・・・』

我々の予定していた料金よりも安い。

『トオルちゃん、イデイさん、どうする？』『ホテルの名前からしてマアマアだろうから、安ければ安いほうがいいから決めよう』我々は客引きの車上の人となった。やがて到着、運転手曰く

『着きました、どうぞ』

『ん？ここ？』

『はい、ここでございます』

しまった、やられた、どこがグッドなんだよ。でもたしかに看板には"金殿"と書いてあるので客引きはウソは言っていない。まっいっか、と中に入るとなんか雰囲気が違う。部屋に通されボーイが来た。開口一番

『いらっしゃいませ、いまちょうどいい娘がいますけど、いかがいたしましょうか？』

なんだ、なんだ、ここは・・？？？そうだったのだ。ここは連れ込みホテル兼売春宿だったのである。

『俺たちゃ純粋なツーリストだぞ、女なんかいらねえ、あっちへ行け』

とボーイを追っ払い、町に繰り出すことにした。

ホテルはクーロン地区なので香港にはフェリーで渡る。久しぶりに旨い中国料理を食いながら話が盛り上がった。香港には小さな船の中でコトを行う男の遊び場所があると聞いたことがある。なんでも女の子が船を漕いで沖にでていくのだそうである。それでその娘と２人だけで一時を過ごすのだそうだ。これは日本にはない。予定していたホテル代も安く済んだし、せっ

かくだからそこに行って金を全部使ってしまおう、ということになった。その場所はまったく知らないが、狭い香港だから人に聞きながら行けばすぐに分かるだろうとタカをくくっていた。しかし、聞く人聞く人みんな知らないというのだ。そのうち人力車のおやじが日本語で

『なにをお探しで？』

と声をかけてきたので聞いてみた。

『はい、そこは知っていますが、ここから離れているので今からでは時間的に無理ですよ』『そうかあ、じゃあホテルに帰ろう。どうもありがとう』

と帰ろうとすると

『お客さん、お客さん、どなたか一人だけ車に乗ってくれれば、もっともっと面白いところにご案内しますよ』

『それってどんなとこよ？』

『若い娘がたくさんいるところで、清潔、安全、明朗会計で安心な香港の穴場ですよ』

とのこと。もうしゃーない行ってみるか、と、トオルちゃんが人力車に乗ることになった。案内されたところは一目でここは「やばい」と感じた。人力車のおやじは宿のやり手婆からチップを貰って帰っていった。部屋の中はピンクの電気がついて、あの成人映画で見るケバケバしい雰囲気そのものだ。私達が入ると鉄格子を閉められ鍵がかけられた。しまった、とんでもないところに連れてこられてしまった、と後悔するもすでに遅し。身の危険さえ感じた。やり手婆が

『いらっしゃいませ。ちょうどいい娘が３人おりますので少しお待ちくださいませ』

やがて３人の娘が来た。オイオイ、ちょっと話がちがうぜ。たしかに１人は娘だが後の２人は婆さんじゃねえか。一人は１５歳前後、他の二人はどうみても３５歳以上というところだろう。

『どうぞすきな娘をお選びください』

俺達３人ともまだ２４歳だぜ、当然３人とも若い娘を指さした。

『困りましたね、ほかの娘たちも歳は大きいけど技術は抜群なので必ずお客様をご満足できますが』

というような事を言ったと思うが、もう俺達の頭の中は女ではなく、ここを無事出られるのだろうかという不安でいっぱいなのである。女なんていらないからなんとかして外に出たい。これを理由に外に出られまいかという考えが３人にあったので、恐る恐る

『３人ともこの娘（１５歳）がいいです。非常に残念ですが、自分の気に入った娘がいるとき又来ますから、今日はこのまま帰りたいです』

と言うと、この後少しの問答はあったが

『では又きてくださいな』

と言って、以外とすんなり鍵を開けてくれたのだった。よかった、よかった、冷や汗をかいた我々は、健康的な香港の夜を過ごせたことを神に感謝しつつ、スゴスゴとホテルに帰ったのであった。

１１月７日。

午前中町をブラブラしたが、香港はとても活気のある町だ。買い物するほどお金がないので見て歩くだけだが、それでも十分に楽しめた。なによりも嬉しかったのは、食べ物が口に合うことだった。パキスタン、インド、ネパールのチャパティは、なんとしても俺には食えなかったからだ。

午後のＪＡＬで香港を離陸した。スチュワーデスが日本語で話しかけてくるのが無性に嬉しかった。

『お客様、お寿司が用意してございますが、よろしかったらお召し上がりになりませんか？』

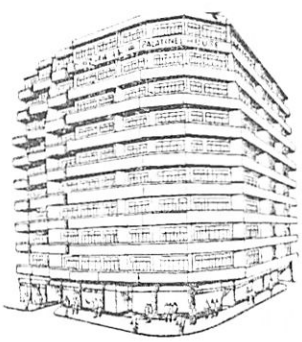
『えー！ 本当ですかー？お寿司ですか、いただきますー』

俺は江戸前のような生寿司を想定していたのだが、出てきたのは稲荷寿司だった。でも半年ぶり、トオルちゃんは１年半ぶり、の稲荷はすごくおいしかった。

やがて左下に夜景が見えてきた。日本だ、やっと日本に帰ってきたんだ。たった半年の旅だったのに長かったような短かったような、ちょっとセンチになる俺であった。

嶋村の日記
１１月８日（日）　１：１５　大森ズシ

羽田に降り立ったときの最初の感想は「日本は寒い」だった。羽田に着くのは嶋ちゃんの方が２時間近く遅いので、彼を待ちながら思い出話に花が咲く。当たり



金　殿
酒店式裝置
旅客理想高尚住所
花園酒吧
九龍尖沙咀加拿芬道33至35號
發利大厦九樓全層
電梯按８字
電話669821

「ホンコン」利用したホテルの名刺

前のことだけど、日本語が通じるのが無性に嬉しい。自分の考えがすべて相手に伝えられないというのはストレスになるものだ。やがて嶋ちゃんがやってきた。計画通りタクシーに乗り

『どこでもいいから駅の近くの寿司屋におねがいします』

と運ちゃんに頼んだ。運ちゃんは

『はあ？どこがいいかなあ、はいわかりました』

と連れていってくれた店が、自分は忘れてしまったが嶋ちゃんの日記には"大森寿司"と書いてある。しばらくぶりの寿司は旨かった。だいぶ盛り上がった後、またの再会を約束してお開きとなった。今日は友達のアパートに泊めてもらおうとポケットに手を突っ込んでハッとした。私のポケットには1銭の金も無かったのである。トオルちゃんに電車賃を貰ってキップを買った。嶋ちゃんの日記には1時15分とあるが、電車とタクシーで友達のアパートまで帰った記憶があるので解散がその時間だったのだろう。

ずっとイデイさんも一緒だったので、この後イデイさんはどこに泊まって、どのように帰ったのかは記憶にない。もしかすると、この夜はトオルちゃんの家に泊まったのかもしれない。

（完）

後記

こうして我々の「逆・深夜鈍行」は終わった。中野は翌年、クラブの仲間と再びヨーロッパに渡りシャモニに永住することになる。後のヨーロッパに於ける彼の活躍は目覚ましく、エベレストで亡くなった加藤保男とともに日本人としては初めて、グループ・ド・オート・モンターニュ会員に推挙された。中野のヨーロッパでの主な登攀歴は、１９６９年、アイガー北壁。１９７２年、グランドジョラス北壁中央クーロワール初登、ブレチェール針峰日本人ルート初登。１９７３年、ドロワット北壁クジー・ルート冬季初登。１９７６年、グラン・シャルモ西壁冬季初登／ｅｔｃ。しかし、１９８５年フランス隊員としてガッシャブルム峰に遠征中、雪崩に遇い遭難。そのころ白籏史朗氏に師事、山岳写真家として独り立ち直前の遭難だった。著書や写真集に、ハイキング・イン・アルプスだっけか？（出版社不明）、トレッキング・イン・ネパール（山と渓谷社）、尖鋒 氷壁 登攀（朝日新聞社）、などがある。奥さんと子供は現在シャモニに在住、日本食レストラン「さつき」を経営している。

嶋村はその後ヒマラヤに２～３回遠征し、アンナプルナ？峰やジャヌー？登頂その他に成功、現在は山学同志会を退会し、山からも遠ざかって仕事に精をだしている。東京新小岩在住。

イデイスミオさんとは大森寿司で別れた後一度も会っていない。当時大阪池田市にいたらしい。イデイさんの住所は必ず聞いていたはずなのに紛失してしまった。なんとか探し出したいものである。

私はこの年、ピッツバディレ北東壁カシンルートやブレチェール西壁ブラウンルートなど１０本を登攀した。この年のヨーロッパは天候不順で多くの日本人が遭難した。シャモニで共に生活していた二人もマッターホルンで消息を断った。

１９７５年にはヒンズーラジの未踏峰・ブラッツヨーズに遠征したが登頂に失敗、その後海外とは縁遠くなり、今では国内で重箱の隅をつっつくようなチマチマとした登山活動を続けている。ナサケナイです。現在、海外遠征の機会を虎視眈々とねらっている５５歳であります。

（本図一統）

＝追伸＝

ヨーロッパで一緒だった嶋村の仲間である高久さんは、現在カトマンドゥで日本レストラン『バンバン』を営んでいる。もしカトマンドゥに行った時はご利用くださいませ。

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman No.188 2001.1.B5 30P 浦和浪漫山岳会
南会津・巽沢山~家向山の肩~窓明山、黒檜沢左岸尾根~三岩岳ほか
◎Rohman No.189 2001.2.B5 18P 浦和浪漫山岳会
日光・前白根山、南会津・小立岩~三本山毛欅峠~山毛欅沢山ほか
◎Rohman No.190 2001.3.B5 24P 浦和浪漫山岳会
北ア・爺ケ岳、蔵王ＯＢ山スキーほか
◎わらじ No.538 2001.1 B5 20P わらじの仲間・
朝日・東大鳥川西俣沢水上沢~同東俣沢源田沢、飯豊・玉川大又沢本社ノ沢、玉川文覚沢、南会津・只見川小戸沢西ノ沢そそろ沢、谷川・万太郎谷オタキノ沢、信越・釜川右俣、魚野川本流、マッターホルンヘルンリ稜、ミディー南壁ほか
◎わらじ No.539 2001.2 B5 28P わらじの仲間
冬合宿飯豊・ガンコ尾根、クサイグラ尾根、北ア・五竜岳、八つ・大同心正面、吾妻スキー場~五色沼ほか
◎わらじ No.540 2001.3 B5 14P わらじの仲間
子ノ権現、妙義山ほか
◎逍遥 No.116 2001.1 B5 10P 逍遥渓稜会
奥多摩・北秋川シンナソー~ヒヤマゴ沢、越後・丹後山~兎岳~中ノ岳、富士山ほか
◎逍遥 No.117 2001.2 B5 10P 逍遥渓稜会
南ア・塩見岳、吾妻・天元台スキー場~グランデコスキー場ほか
◎逍遥 No.118 2001.3 B5 16P 逍遥渓稜会
奥日光・刈込湖、切込湖、房総・キンダン川、丹沢・中川川西沢本棚沢、上越・タカマタギほか
◎Next！ No.61 2001.1 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
仲間の近況報告、リレーエッセイほか
◎Next！ No.62 2001.2 B5 14P 山岳渓流釣り集団むげん
つづら岩、仲間の近況報告ほか
◎Next！ No.63 2001.3 B5 10P 山岳渓流釣り集団むげん
仲間の近況報告、友好団体会報紹介ほか
◎とまのかぜ No.98 2001.4 B5 26P 童人トマの風
房総・ビル沢、会津・中山峠~水無山、谷川・西黒尾根、奥多摩・陣馬山~三頭山、春日ルンゼ、八つ・天狗岳、顎城・大毛無山、上州・上州武尊山ほか
◎とまのかぜ No.99 2001.5 B5 39P 童人トマの風
八つ・南沢大滝、ジョウゴ沢、北ア・燕岳、南ア・聖岳、ニュージーランドの沢登り、八甲田・前岳、八幡平・中倉岳、南ア・北岳、八つ・広河原沢左俣、西上州・荒船山犬殺の滝、両神・金山沢、塩原・富士山、前黒山ほ　か
◎とまのかぜ No.100 2001.6 B5 25P 童人トマの風
会津磐梯山、西上州・神津牧場、南会津・小野岳、安比温泉スキー、上州・吾妻、北八つ・雨池~双子池~亀甲池、南ア・尾白川、丹沢・大倉~丹沢山~檜洞丸、谷川・武能岳西尾根ほか
◎山紫水明 No.70 2001.2.B5 18P 山旅の会
山旅祭、奥多摩・ミツドッケ、ドイツ・ツークシュピッツェ、富士雪上ほか
◎山紫水明 No.71 2001.3.B5 10P 山旅の会
八つ・東天狗岳ほか
◎すずらん通信 No.237 2001.1 B5 17P 鈴蘭山の会
野沢温泉初滑り、八つ・赤岳ショルダー右リッジ、八甲田・大岳ほか
◎すずらん通信 No.238 2001.2 B5 13P 鈴蘭山の会
三田原山山スキー&雪崩講習会、栂池ラッセル訓練、北ア・中岳西尾根ほか
◎すずらん通信 No.239 2001.3 B5 15P 鈴蘭山の会

上信・四阿山~根子岳、岩鞍スキー場~西山~津奈木橋~笠ヶ岳、八つ・天狗尾根、霞沢岳西尾根、栂峰ほか

会報

◎ADVENTURE・forum No.5 2001.2 A4 8 植村記念財団

HIS MEMORIY, THE CHALLENGERS・山野井泰史ほか

◎野良犬通信 Vol.7 2001.3 B4 58P チーム野良犬

青島靖氏の1999年個人記録集。ハイキング2本、沢登り18本、氷登り1本、山スキー14本、行動は北海道から屋久島まで広範囲におよんでいる。

◎溯行 No.19 2000.4 B5 164P 大阪わらじの会

1999年の記録が多いが、古い記録もある。越後3本、東北1本、谷川1本、中央ア1本、白山2本、奥美濃1本、鈴鹿1本、台高8本、大峰30本、南紀1本、屋久島2本ほか

◎登山報告書 2000.12 B5 68P 托木爾堤峰登山隊

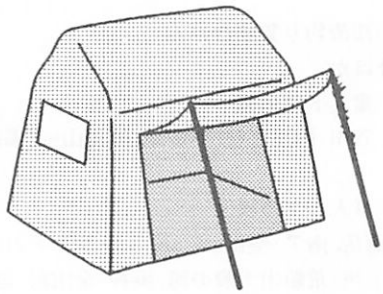
茨城県山岳連盟副会長の荒木浩二氏(水戸山の会)が、登攀隊長で中国のトモルティ峰にアタックしたが登頂はならず。

◎横尾尾根遭難事故報告書 2000.9 A4 95P 中央大学山岳部

我々が2001年正月にアタックした横尾尾根の遭難報告書。

中央大学2年生の佐野裕哉氏が平成12年5月2日、P6、P7間で雪庇を踏み抜き転落。

以上閲覧したい方は本図まで



編集後記

１０年。言葉にすれば短いが、谷あり山ありの長き日々でした。それでも創刊号当時と比べればかなり文集らしい形にはなってきました。が、如何せん。１０年にして大きな壁に突き当たり、私の古いＣＰＵでは、処理能力に限界が来てしまった。昔だったら〇〇十万もした高価なパソコンも１０年もすれば、誰も見向きもしないものになってしまう。これからは処理能力の早い超高性能の新しいスタッフ（木村氏、渡辺女史）にバトンタッチして、処理能力の低いＣＰＵ搭載の私はマウンドを降りて、影ながら足を引っ張りたいと、いや、応援したいと思います。では、さらばじゃ！。

編集長　生井一男

Ｒ＆Ｖも今号で４０号を数えました。１０年間に渡り編集部員をさせていただきました。あるときは編集長に推挙されたこともありましたが、すぐに極悪変酋長との理由でクビになり、その後は原稿取り立て屋として、一意専心（どっかの横綱の言葉？）無給で働かせていただきました。でも、持って生まれたスケベな性格はどうにもならず、読むに忍びない文面を書くことから、女性会員より非難の矢が浴びせられ、解雇の危機もありましたが、なんとか１０年間を勤め上げることができました。しかし、１０年間続いた、生井、本図体制の汚職が発覚、さらに使い込みもバレて（本当は自腹を切っていたんだよバーロ）しまいました。加えて会報のマンネリ化は避けられず、編集部活性化を図るため、役員を一新することになりました。これからは新編集部への協力はまったくせず、慌てふためいている姿を陰から見ながら、あざ笑っていきたいと思います。会員の皆様、本当に長い間苦しめてくれてありがとうございました。

原稿取り立て係　本図一統

季報［Ｒ＆Ｖ］第４０号　発行２００１年　春
発行者：本図一統
発行所：ＡＣＣ－Ｊ茨城　〒３０６－０５０１　茨城県猿島郡猿島町逆井３１８
生　井　一　男　方
編集者：生井一男
印刷所：やさと 印刷

ALPINE CLIMBING CLUB OF JAPAN

ACC-J茨城

岩壁、沢、冬山のクライミング集団